

日本

生理学

雑誌

JOURNAL OF THE PHYSIOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

54巻

7号

1992

酒井敏夫：日本生理誌編集10年の歩み	249
NEWS OF IUPS ACTIVITIES 1990~1991	255
生理学の広場 「生理学者群像」(久光 正)	259
日本学術会議だより 学術国際貢献特別委員会設置される	259
日本医学会だより 日本医学会だより No. 7	262
お知らせ 上原記念生命科学財団平成4年度上原賞(研究業績褒賞)受賞候補者推薦要項	263
平成4年度(第9回)井上學術賞候補者推薦要項	264
平成4年度(第14回)沖縄研究奨励賞候補者推薦応募	265
第1回日本バイオイメージング学会学術集会	265
第8回神経研国際シンポジウム(神経研創立20周年記念)随意運動制御に おける小脳と大脳基底核の役割	265
千里ライフサイエンスセミナー「老化と老年病(1)―最近の進歩―」	267
第4回バイオ素子国際シンポジウム	267
1993年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び 研究助成候補者の推薦依頼について	268
第16回日本神経科学学会	268
「日中医学大会 1992」	269
第31回国際臨床視覚電気生理学会(第2回案内)	269
第11回嗅覚・味覚国際シンポジウムのお知らせ	270
日本生理学会会費払込みについてのお願い	271

新登場



リスト=ヘカ
パッチクランプシステム
EPC-9

ベストセラー EPC-7 で世界を席卷したリスト社の会心作
噂のパッチクランプ・ワークステーションがついに登場です

- ◆パッチ/フォールセル用アンプ、スティミュレータ、デジタルオシロスコープを
インテグレート、これらをアタリ・コンピュータによりコントロールします
- ◆パワフルなデータ・アキュイジション、さらに専用の解析ソフトによって、データの
観察・収集から編集、解析、プリントアウトまで、完璧なネットワークを誇ります

※ 詳しい資料を下記へご請求ください

リスト社 日本総代理店
EPC-9 西日本地区発売元

 ショーシンEM株式会社

〒444-02 愛知県岡崎市赤渋町蔵西1-14
ショーシンビル2F

TEL. 0564-54-1231
FAX. 0564-54-3207

EPC-9 東日本地区発売元

(Physio-Tech)
株式会社 フィジオテック

〒101 東京都千代田区内神田3-10-3
コイダビル4F

TEL. 03-3258-1641
FAX. 03-3258-1657

日本生理誌編集10年の歩み

編集幹事 酒 井 敏 夫

第70回日本生理学会大会第2報が、日本生理誌第54巻第6号に掲載された。大正11年(1922)東京で第1回大日本生理学会大会が開かれてから、愈々日本生理学会も古稀を迎えようとしている。

学会機関誌である日本生理学雑誌(日本生理誌)は、昭和11年(1936)に刊行され、平成4年(1992)度は54巻を数える迄になった。機関誌は、学会の顔でもあり、学会の歴史的所産を遺す重要な役割りを演じてきた。従って、日本生理誌は出来る限りの学会情報が記載されていることが望ましい。編集委員会は、広汎な学会の活動を見渡し、緩急自在な出版活動が要求され、up to dateの情報を会員に伝達する機能も必要とされる。月刊誌としての正しいperiodicalな刊行も厳しく望まれるところである。

学会の編集幹事として、昭和56年(1981)5月以来、私は日本生理誌の編集に携わった者として、古稀を前に編集10年の反省を行って置きたい。

幸い、第69回日本生理学会大会当番幹事より、大会におけるレビュー講演を指名され、日本生理誌編集の10年という話を行う機会を持った。この時の資料を基に話を進めたい。

(1) 編集幹事のバトン・タッチ

私は、昭和56年(1981)4月、編集幹事を受け継ぎ、申し送り事項として以下の如きことが尊重されるべしとあった。1. 総説の掲載。2. 巻頭に常任幹事をなさった方および特別会員の追悼文掲載。評議員の訃報と追悼文のブルー・ページ掲載。3. 外国の著名な生理学者追悼文のブルー・ページ掲載(写真を含めて)。4. Current Contentsの掲載。勿論、従来通り原著論文、短報などの継続は存続する。

この頃、原著論文が減り、総説の掲載は皆無であった。薄い日本生理誌が送付されて来ても

開封されることなく、屑籠に投げ込まれるとの噂を耳にすることもあった。反面、この時程、編集についての議論が活発であったことはなかった。米国生理学会の「Physiologist」の姿がモデルになるとも云われた。なんの事は無い、日本生理誌の掲載規定は立派に出来ており、多く先人達が理想の像を作り上げていた。実現しないのは、それこそ創造性の欠如と編集実務に工夫が足らなかったとも云える。研究・教育などに多忙な人々の集りであり、已むを得ないことでもあった。

兎に角、現状分析を行い、その結果を日本生理誌第43巻5号(昭和56年5月, 1981)に発表し、いろいろの施策を実行に移して行った。年度予算を睨みながらの上である。それでも会計幹事からは温い声援があったことは心強かった。

(2) 生理学論文表題集の号外編集の試み

是非共、総説欄の復元をと思い、先ずそのための措置から手を染めた。それは、論文表題集を日本生理誌と独立した出版物とし、その頁分を総説に当てることであった。分析結果が示す如く、年々論文表題集の増頁は目を眩るものがあり、時には論文表題集のみの頁で機関誌の姿が失われ兼ねないと想像もできた。

論文表題集は、従来のスタイルでは分割方式で各号に掲載され、九州地区の分は年度の終り頃になってしまいうきらいがあった。新しい論文表題集は、活版印刷からオフセット方式へと転換し、日本生理誌号外として、但し日本生理誌の印刷・出版計費から除外して定価販売とする案をたてた。結果は、初期の計算とはやや高めになってしまったが、多くの方々から愛顧を受け、まずまずの成功といえた。日本生理誌44巻号外昭和56年(1981)度表題集は246頁、45巻昭和57年(1982)度は260頁と漸次頁数が増し、

51巻, 昭和63年(1988)度の号外は356頁と驚くべき内容に成長し, 表題集原稿作成要領にも改訂が加えられ今日に至っている。4月末までに集められた原稿は, その年の8月には製本・発送という迅速さで円滑に行われ, 活版印刷の時代の校正からの解放も編集委員会活動の上では一大進歩と云わねばならない。

この様にして, 日本生理誌から表題集経費の節約が実行されるとなると, 懸案の総説掲載の復活にメドが付き, 早速実現の運びとなった。

日本生理学会論文表題集の刊行が今日まで特別の抵抗もなく行われて来たことは, 他の学会領域においては見られないことで, 業績管理のデータ・ベースのシステムが未だ本道に乗りきれていないことを考えると一大傑作といわねばならない。

因みに, 第53巻(1991)号外, 平成2年度生理学論文表題集(1990)は総頁394頁で研究単位(教室・研究所研究室)は259であった。上述の様に廉価の維持が10年間続いたが, 最近では購入数の減少のため, 定価の維持が困難ともなっている。

(3) 生理学総説執筆の伝統

大正11年(1922)7月に第1回の大日本生理学大会が東京で開かれ, 文字通りに日本生理学会が誕生した。しかし, ただちに機関誌は発行されず, 幾多の議論を経て, 昭和11年(1936)によりやく刊行された。内容は年次大会の演題抄録ならびに投稿原著論文がもっぱら編集の対象となっている。故戸塚武彦教授のお話によると, 日本生理学雑誌編集委員会の席では, 上述の編集のほか, 会員研究者の業績収集と, これらの資料を基にして総説執筆作業の実現を早くから議論され, 総説掲載の意図があったという。このことは, 難産であったが, 考えは「生理学試道集」に引き継がれ, さらに「日本生理学評論」という総説を主体とする和文雑誌(故浦本政三郎教授主幹)がつくられ(昭和16年(1941)), その後の生理学総説の先駆けとなった。しかし, これも太平洋戦争という悪条件に

遭遇し, 残念ながら第2巻昭和17年(1942)をもって終焉した。

「日本生理学雑誌」が第33巻昭和46年(1971)を数えるようになった時, 「生体リズム」の特集号が企画されたが, これが契機で日本生理誌にも総説が掲載される編集方針が確立した。これも残念ながら, オイル・ショックという経済的悪化のため, やむなく中止されてしまった。日本生理誌に, 総説が見られなくなっても, 当初の精神は受け継がれ, 編集幹事交代の申し送り事項の中には「総説の掲載とその取扱い方の検討」という表現があった。

再び, 日本生理誌に総説が掲載され始めたのは, 第44巻昭和57年(1982)からであった。以来, 1巻ごとに4~5編の総説が紙面を飾り, その内容もバラエティーを持ち, 本誌も会員の皆様から頁を繰ってもらえる意義ある雑誌となった。すでに8年の実績を積み, 若い会員の中からは, 総説集編さんの声が聴かれるようになった。これには次のような努力があったからと思われる。

総説執筆者への執筆依頼は, 各地区編集委員からの推薦を中心にリストがつくられ, これがさらに在京編集委員会の検討を経ながら実行に移されていった。東京地区からの執筆者はしばしばピンチヒッターの役を受け持つ格好となった。さらには, 元編集委員の方は, 総説執筆の権利を持っている人とみなし, 機に応じてお願いした。こんな手順がとられるようになったので, 執筆者分布も全国的に平等化され, 題目も豊かとなり, 大会や談話会では得られない研究上のインパクトが受けられるようになった。これも, すべての執筆者が全力投球をしてくださった結果と感謝している。

総説の実績があがってくると, 総説集の編集をとの声が挙り, この結果が1980年代の日本生理誌掲載総説集となった。これらを11章に分類し, 上・下巻に編集し直してみた。このほか, 2, 3の生理学大会が計画した特別講演, 解説講演の中から, 上記総説と同一視して適当に選んでみた。教科書のごとくにすべての生理学

項目を満たしているわけではないが、事のほか、時宜を得たもの、近い将来を展望できるものなどがあり、日本生理学会研究者の素晴らしい研究活動を目前に見る思いがあった（日本生理学会生理学総説集，序文，1990）。

(4) 日本生理誌における特集企画

日本生理誌の編集経過の中で、編集委員会は歴史の節目ごとの記念特集とか、これとは別に臨機応変の特別企画を行って来た。

A. 日本生理学会60周年その発展と展望

富田恒男：減衰不減衰学説論争以後の神経生理学の発展

古河太郎：微小電極法がもたらした日本神経生理学の発展

〔日本生理誌第46巻 No. 1

（昭和59年，1984）〕

この様な歴史の節目ごとに計画されたものは、40周年、50周年にも行われており、日本生理学会史の上では貴重な資料として遺されている。

その後、第69回日本生理学会大会のシンポジウム「我が国における神経生理学の過去・現在・未来」にも古河太郎氏の Historical overview が取り上げられた。この時の講演内容を日本生理誌に取り上げることの声を後日耳にしたが先の記述がある故を以て割愛した。

B. 特集 生理学談話会の歴史的推移

日本生理学会発展史の上で、最も基盤になってきたものの中でも特筆すべきは生理学東京談話会の存在である。すでに227回を数えて今日に至っている。太平洋戦争が終わってから、生理学談話会は、各地区毎に行われ、それぞれ特色を現出しながら運営されている。戦後もすでに40年、学会にも一層の厳しさが望まれるようになり、生理学談話会の運営にも批判が加えられるようになった。これを察知して、日本生理学会編集委員会は、生理学談話会の歴史的推移を記録に遺す計画を立てた。奇しくも、故中山昭雄教授が常任幹事会で近畿地区生理学談話会の現状を批判し、大きな波紋を投じた。特集も

全国的規模で展開された。

市河三太：生理学東京談話会小史

一草創期と戦後の変遷一

吉村寿人：近畿生理学談話会成立の経過

広重 力：日本生理学会北海道地方会の歩み

中山 沃，岡 芳包，福原 武：

日本生理学会中国・四国地方会の歩み

後藤昌義：西日本生理学会小史

大原孝吉：生理学中部談話会30年史

鈴木泰三：東北生理学談話会の歩み

〔日本生理誌，第46巻 No. 11～No. 12

（昭和59年，1984）〕

刷上り53頁にもなる堂々たるもので、著者もまたと得られない顔ぶれの執筆陣であった。市河三太教授には大変ご苦勞を掛け、出来る限りの資料を基に草創期の生理学会の有様を現実に見るが如く記述された。正式に日本生理学会が成立に至るには幾多の先人教授達のご努力が存し、今となつては掘りおこすことは出来ない価値ある資料がある。この資料に関しては項を別に於て取上げたい。この記述に現われる事象は一つ一つ取上げ説明を要する時代になってしまった感が強い。市河教授の言葉を借りて云えば、「生理学東京談話会の歴史を振り返ってみると、凡そ考えられる全ての試行が行なわれ、ある時は減衰し、ある時は増強されている」と。すべてが必ずしも価値を失ったものではないとされている。又、東京地区以外は、第二次大戦の戦後の混乱、乏しい物質、不十分な研究設備の中にも、戦後の復興という気運が高まった頃から、自主的にそれぞれの生理学談話会が相前後して発足して行った。中部生理学談話会を執筆された故大原孝吉教授は、「学会がその本来の趣意を見失うことなく運行されて行く限り“天行は健なり”の言の如く、形のいかんにかかわらず生生発展するであろう」と談話会の存続を肯定せられている。故中山教授からの動議に対し、これだけの議論が行われ、その内容が将来の糧として遺されたことは、日本生理学会ならではの感が強い。

C. 名著復刻への道

昭和60年12月23日の日本生理学会常任幹事会の際、日本人生理学者執筆の名著と云われるものの復刻の話が出された。日本生理誌編集委員会の立場として、故若林 勲先生（東大名誉教授）と計り、26著書を取り上げ、一部には解説を付ける編集を行った。解説には、それなりに古くて新しい読物としての価値あるものが多かった。残念ながらこれらのものが復刻される機会を失い、今日に至っている。幸い、余外集、試道集は、古い先生方のご援助を得て、以下の如く復刻が行われた（日本生理誌、第48巻9号、1986）。

余外集、試道集

「生理学東京談話会小史」市河三太先生の著述の中に度々取り上げられた資料として余外集と試道集があった。これらは、日本生理学会並びに日本生理誌の過去を語るルーツともいえる。

余外集は昭和9年（1934）7月に刊行され、第3巻8、9号まで続き、昭和14年（1939）10月に終刊となっている。この刊行は、日本生理学会の機関誌としての日本生理学雑誌創刊を促進することにあつたといわれる。余外集創刊号には故橋田邦彦教授の創刊の辞が飾られている。“言語に死活なくして句に活死あり、之を人に一任す。科学を会得せんとせば須らく先ず言語を生々たらしむべし、他なし其の人を識るにあるのみ、凡そ科学は理智の極むる所にして人の人たる理智にありと云うを得可けんも、科学のみを通じて識らんこと難し、蓋し人に情あり、意あり、意の響く所情の溢るる所自ら言句となる。理智よりして之を觀れば余外に過ぎずと雖も、しかも人の全幅始めて躍如として現前す。故に人を識らんと慾せば餘外を見るに如くはなし、之を餘と云い外と云う赤心の片々なり”市河先生は、この“余外”が今の人に軽視ないしは無視され勝ちであるように思われると感慨を残しておられる。余外を大切に、幅広い大きな研究者となって貰いたいとも云われ、同感するところであつた。余外集には、生理学

者のお一人お一人が自由に考えを述べ、談話会での自由な討論の再現があり、繰返し繰返し読んで味が出てくる様に思われる。日本生理学会創始者達の若き情熱が凝集されているといえる。アメリカ合衆国の *Physiologist* がよく話題になるが、余外集はこれを越えた姿があると云ってよいだろう。かくして、昭和11年（1936）2月に待望の大日本生理学雑誌が発刊された。編集委員長には故戸塚武彦教授が推薦されている。

余外集は、その後しばらく続刊されたが、機関誌の発刊に伴ってその任を終ったことになる。しかし、その後、新しいアイデアによる試道集が生れた。試道集は故浦本政三郎先生が編集に当たられ、主として評論、総説的な誌面づくりに重点が置かれたと云って良く、上述の機関誌が原著論文のみであつたのに対して、整合性の考えを示されたと云ってよい。試道集は、その後、短命ではあつたが「日本生理学評論」に姿を変えて行った。余外集と云い、試道集と云い何れも初期の日本生理学会の歴史の歩みをするし続けたわけであるが、太平洋戦争と共に消え、雑誌発行なるが故に各号が飛散する運命にあつた。市河教授といえどもそれらの資料が手元になく、小史を書くに当って多くの大学、図書館を歩かれ、全頁に目を通すことが如何に困難であつたかを後日譚として語られた。

私は、この後日譚を故若林 勲先生に語ったところ、先生の所持しておられるものと、戸塚先生宅にあるものとを合わせれば、復元可能なことをつきとめて下さった。日本生理学会の歴史を埋める資料として、今この復刊を思い立つ絶好の機会として、常任幹事会にこの計画を報告し、直ちに実行に移した。勿論、原本は、故若林、戸塚両先生からお借りし、それぞれ単行本の姿とし、若林先生並びに西丸和義先生の復刊のことばを添えて100部限定の刊行を行った。

これらの事業から、故若林先生は強く、日本生理学会の先人達の名著を失なつてはならないと、このために私のところまでお出で下さった。編集幹事として、すべての名著を余外集、

試道集の如く復元は出来な かったが、「名著復刻への道」として日本生理誌に掲載した。これら掲げられた名著が、ただ何処かの 書庫に眠り、だれの目にもふれないでいたら新しく生理学を学び始める人々にとっては大きな損失といわねばならない。岡崎生理学研究所に保管されるようにと提言を行ったのではあるが、

(5) 日本生理誌大会号 (8・9号) と

Japanese Journal of Physiology Supplement の関係

第66回日本生理学会大会の Academic Publications が The Japanese Journal of Physiology の Vol. 39, Supplement, 1989 として誕生したことを心から慶びたい。これは、当番幹事、J. J. P. 編集委員会並びに日本生理誌編集委員会3者の合同編集になるもので、関係した日本生理誌編集の立場から、Supplement 刊行に至った経緯をふり返ってみたい。

第1回大日本生理学会(昭和23年に日本生理学会と改名)は大正11年(1922)に開催されたが、当時は機関誌の存在が無かった。従って、発表要旨は故橋田邦彦教授編集の Journal of Biophysics (大正15年, 1926発刊)が機関誌的役割を演じ、欧文訳が行われ掲載された。これも2巻で終わったので、文部省学術会議編集になる Japanese Journal of Medical Science, Biophysics に継続掲載されることになった。機関誌としての日本生理学雑誌の誕生は昭和11年(1936)である。以後、日本生理学会大会の抄録は機関誌に掲載されることとなり和文抄録として記録されて行った。

その後、生理学談話会の抄録も誌上に掲載されることとなり、昭和14年(1939)からのものが公式と認められるようになった。これが平成2年の改正に至るまでの日本生理学会会則の「一大会および地方部会の講演抄録を発表するための機関誌 邦文の日本生理学雑誌、一」となって経過した。

日本生理誌とは別に、昭和25年(1950)、評議員会の議決により故久野 寧教授主 監の Jap-

anese Journal of Physiology が刊行され、後日、日本生理学会が編集するように変遷し、準機関誌的ニュアンスが持たれている。

終戦後、多くの生理学者の留学、さらには国際交流が盛んになるにつれ、大会並びに生理学談話会での抄録の英文化の声が大になるようになった。日本生理誌編集委員会においても委員間で、英文化の議論が盛んに行われた。特に、東京で行われた国際生理科学会議を経てからはその機運が高まったと云ってよい。

第47回日本生理学会大会(昭和45年4月, 1970)が昭和大学医学部で開かれた時より、大会抄録は英文でも和文でも良いということになり、学会抄録の英文化の先鞭がつけられた。これに準じて、生理学談話会の外国人研究者との協同研究は英文抄録が許されることとなり今日に及んでいる。大会抄録すべてが英文になったのは第56回大会(慈恵医大, 昭和54年, 1979)で、この時のレイアウトが継承されるようになった。当番幹事の権限で行ったのであるが、不安も伴った一つのカケでもあった。

大会抄録の英文化が実現したものの、日本生理誌が機関誌であるという性格と、何分にも邦文誌であるがために、海外との交流手段に欠けることは否めない。従って折角英文化へ進んだからには、J. J. P. への移管がささやかれるように展開したのは当然といえる。

日本生理学雑誌は、8・9号を大会号と称し、会則に従って発行されている。英文化に進んだ大会号といえども機関誌である日本生理誌から外して J. J. P. に移管するわけにも行かず、両誌の編集委員会は別個の独立した機能として業務が遂行されている。日本生理学会の内部業務である以上、両者のジョイントは容易の様に見えるが、J. J. P. の刊行が刊行センターの傘下にあり、日本生理誌及び J. J. P. の意志疎通が必ずしも平滑に進まないきらいがあった。移行の実現となると会則改正もあり得るわけで、意志疎通には時間が必要であった。

日本生理誌編集責任者でもある私が、J. J. P. 編集委員になってから、度々、両編集委員会で

大会抄録の J. J. P. 移管問題が話されるようになり、両編集委員会の考え方の疎通が計られるようになった。第100回 J. J. P. 編集委員会(昭和62年11月21日)の結論として、常任幹事会の議題に取り上げてもらい、検討することとなった。J. J. P. 編集委員会委員長本田良行教授は、精力的に本件と取組み、日本生理誌編集委員会全メンバーとの話し合いも実現した(昭和63年3月9日)。話は進捗して J. J. P. の Supplement として刊行するに際し、両編集委員会の合同編集ということで、第65回日本生理学会大会における常任幹事会に提案されるまでに至った。和歌山における日本生理学会昭和63年度第1回常任幹事会の本田委員長の提案に対し、共同編集には当番幹事も加えること及び学会会則4条の改正を行うことを了承し、最終的には評議員会・総会の提案となった。その結果、第66回大会から実施されると共に、日本生理誌の8・9号、即ち大会号は、抄録は J. J. P. Supplement となるが、その他の大会に関する必要事項は残されることとなった。

かくして長い懸案であった大会英文抄録の J. J. P. Supplement の刊行は1989年第39巻として出現した。すでに第40巻も刊行済みである。この懸案の遂行は、本田良行並びに広重力両 J. J. P. 編集委員長の努力が実った成果と

いえよう(日本生理誌, 第53巻第5号, Japanese Journal of Physiology Supplement 刊行への道程, 1991)。

編集を遂行する上で、ブルー頁の制度が存在したことは何かにつけて有難かった。国際生理学会議からの情報の伝達並びに出席会員からの学会便りを始めとして、日本生理学会教育委員会活動の援助は当初より気を配った。この外、自由なご投稿にも門戸の開放に努力したが、これには編集委員会の雰囲気のためか予想を下廻った。Senior Physiologist の“寸想一話”をもっとお願いすれば良かったとの反省も残る。

「生理学者群像」のカラムは努めて執筆をお願いした。また、これからも続けるつもりでもある。一つの研究グループで活躍していても、広い生理学会を始め、学術的な領域での存在を認識してもらえない憾みがある。折角の研究も、広い知己を持たなければ発展も望めない。存在のアピールを積極的にこの「生理学者群像」で行って下さることを期待する。

研究活動の上で、コンピュータ研究会は大いに日本生理誌を利用され、私達も協力したつもりであった。この種の如き研究活動については広い分野にわたるご利用を願っている。

INTERNATIONAL UNION OF PHYSIOLOGICAL SCIENCES

COUNCIL :

SIR A. HUXLEY, UK, President
 M. ITO, Japan, 1st Vice President
 P. KOSTYUK, USSR, 2nd Vice President
 H. SPARKS, USA, Treasurer
 R. NAQUET, France, Secretary
 R. BERNE, USA
 T. P. FENG, China
 E. FROEMTER, W. Germany
 M. GEROVA, Czechoslovakia
 J. JANSEN, Norway
 K. KRNEVIC, Canada
 R. LATORRE, Chile
 R. RAHAMIMOFF, Israel
 E. WEIBEL, Switzerland
 M. WINTOUR-COGLAN, Australia



OFFICE OF THE SECRETARY

ROBERT NAQUET
 LABORATOIRE DE PHYSIOLOGIE NERVEUSE
 C.N.R.S.
 AVENUE DE LA TERRASSE
 91198 GIF-SUR-YVETTE, FRANCE
 TEL. (33-1) 6907 6145
 TELEFAX (33-1) 6907 0538

NEWS OF IUPS ACTIVITIES 1990-1991

A Regional Meeting organized in Prague in July 1991 by the Association of Czechoslovak Medical Societies J.E. Purkyne and the Czechoslovak Physiological Society was greatly appreciated by more than 1200 participants from over 30 countries. In addition to the 61 symposia held during the 5 days, two successful workshops were held beforehand dealing with Teaching of Physiology (40-50 participants) and Experimental Methods in Neurobiology (40-45 participants).

Preceding the congress itself the IUPS Council held its two yearly meeting presided by Sir A. Huxley and with P. Kostyuk, H. Sparks, R. Naquet, R. Berne, T.P. Feng, E. Frömter, M. Gerova, J. Jansen, K. Krnjevic, R. Rahamimoff, E. Weibel and E.M. Wintour-Coglan participating.

The International Project Committee, chaired by R. Rahamimoff, continues to be most active. Among other activities coming under its aegis in 1990 and 1991 were:

- a highly successful FAOPS (Federation of Asian and Oceanic Physiological Societies) meeting in Delhi in November 1990.

- a meeting organized by the European Oocyte Club in Israel in April 1991 with some 40 participants; this same group plans to hold a teaching meeting every two years with the next one to be 1993 in Switzerland.

- a Pacific Rim Regional Meeting being organized by J. Ledsoe (Vancouver) may become an IUPS Regional Meeting if the dates can be coordinated and it is held in conjunction with FAOPS.

- a very successful French teaching workshop in 1990 in Rabat, Morocco; a second one is planned for May 1992.

The Committee to Review Commissions chaired by D. Denton (F. Dejours, E. Knobil, K. Krnjevic and E. Weibel) has distributed to the commission chairs definitive guidelines, based on the Council approved 'Glasgow formula', concerning terms of membership and participation. This Committee on Commissions will continue the task of reviewing all the commissions and report to the 1993 General Assembly.

With regard to IUPS Commissions, among suggestions put forth and approved by Council were: (i) that the Commission on Fundamental Neurophysiology be divided into two: one in the field of Cellular and Molecular Neurophysiology and a second in Learning and Memory; (ii) the Commission on Circadian Rhythms and Sleep be renamed after consultation with the new chair; and (iii) that the formation of a new Commission on Reproductive Physiology be formally presented to the General Assembly for approval. R.G. Edwards, (Cambridge, U.K.) has accepted the invitation to chair this new commission and has been authorized to initiate activities in advance of formal approval of the Commission by the General Assembly.

It was agreed that R. Short (Melbourne) become Chairman-elect of the Commission on Comparative Physiology. The proposed membership of the newly formed Commission on Pathophysiology was approved as was the proposed new member of the Commission on Clinical Physiology.

The Nominating Committee for 1993 chaired by H. Valtin, Chair with D. Denton, S. Ebashi (Okazaki, Japan), P. Kostyuk and R. Naquet) have been working on a slate and will meet in mid-1992 to finalize their selections.

It was decided to change the procedure for election of the Officers and members of Council so as to give the Adhering Bodies a better opportunity to participate. However, there was unanimous agreement of the Council that no change be made to the Constitution and By-Laws. Thus for the next General Assembly the proposed slate will be sent to the Adhering Bodies several months in advance to allow them to add names to the slate at the General Assembly if approved by one third of the delegates. A forthcoming newsletter will clearly define these proposed changes.

Based on decisions taken at the 1989 General Assembly, there are two New Committees Reporting to Council:

- Ethical Aspects of Physiological Experimentation. In order to avoid duplication of effort, it has been decided that IUPS will nominate some members to serve on the committee which IBRO (International Brain Research Organization) recently set up on Animal Experimentation (Chair, R.W. Guillery, Oxford). Although for the IUPS Committee a chair has not yet been confirmed, it has been agreed that it should have four or five members and devote itself primarily to such areas of reflection as human embryology; transgenic animals; experiments on humans; a study of rules, regulations, public statements, etc. from various countries; special symposia at meetings; cooperation with medical associations.

- Integrative Physiology. H.P. Koepchen (Berlin) has agreed to chair this new committee to advise the IUPS Council on steps to emphasize the importance and interest of the physiology of whole organs, their interactions and their regulation, as opposed to the subcellular levels which have become so fashionable in recent years.

At the next General Assembly several societies will be presented by the Admissions Committee as prospective members: The Pakistan Physiological Society as an Adhering Body; The Sociedad Chilena de Ciencias Fisiologicas as an Adhering Body in place of the Sociedad de Biologia de Chile; The Physiological Society of Sri Lanka as an Associate Member in place of the Natural Resources, Energy and Science Authority of Sri Lanka.

Plans for the 1993 Congress, Glasgow, 1-6 August, are advancing very well. The Princess Royal has agreed to be Royal Patron. The scientific program will have a new format and consist of over 20 themes each made up of several symposia. Each theme will last for most of the week and symposia may extend for between half a day and 5 days. As a means of publicity a short statement is being translated into numerous languages to be used as a 'talking point'. In addition, twelve articles are being prepared for a book on integrative physiology with Sir James Black writing the preface. Once again, given the success of the workshop held in Kuopio, an ambitious Teaching Workshop for participants from developing countries is being organized by the Commission on Teaching of Physiology in Inverness the week before the Congress. Limited funds will be available to support travel from developing countries both for this workshop and the Congress itself. Sir Bernard Katz (London) will present the Fenn Lecture of 1993. In recognition of the many services rendered to the IUPS by former president Eric Neil, B. Folkow (Goteborg) will present a lecture in his memory.

The local organizers of the 1997 Congress (Institute of Experimental Medicine, Pavlov Institute and the Human Brain Institute) will officially confirm at the 1993 General Assembly their invitation to host the Thirty-third International Congress of Physiological Sciences in St. Petersburg in 1997. S. Medvedev (Institute of the Human Brain, Pavlov str. 9, 197022 St. Petersburg, Russia) is in charge of the preparations.

The official archives of the IUPS are stored in the American Philosophical Society Library in Philadelphia and are currently being organized by a volunteer in conjunction with R. Berne, Department of Physiology, University of Virginia School of Medicine, Charlottesville VA 22908, USA. A proposal that an addendum be made to the By Laws describing the Archives was approved; it will be submitted to the General Assembly.

The committee on IUPS Fellowships chaired by H. Valtin with M. Gerova and R. Latorre received applications from numerous developing countries. The candidate chosen for 1992 was Chikodi Anigbogu of Nigeria who will receive a stipend to spend a year at the University of Kentucky. A similar fellowship will again be offered in 1993 for 6 months with a second one possible if match-

ing funds can be obtained. Additional developing countries are being added to the list of candidate countries. Each of the Adhering Bodies and Supporting Societies will be informed of this program.

The Council agreed that the program of subsidized subscriptions to NIPS for scientists in developing countries and Eastern Europe will be continued for another year.

A page will now appear in most issues of NIPS devoted to IUPS news (council meetings, names and addresses of commission chairs, a report on the Glasgow congress and invited articles from commission chairs). All information is to be coordinated and submitted through the Secretary's office.

Sir Andrew, R. Naquet and E. Frömter represented IUPS at the council meeting of the FEPS (Federation of European Physiological Societies) on July 2 in Prague. The good relations between IUPS and FEPS were confirmed and discussions about mutual representation were begun.

ICSU is planning to start some new large studies and has asked for suggestions in the Life Sciences. Sir Andrew representing IUPS at the September 1991 ICSU General Committee meeting in Oslo proposed the topic of Animal and Human Reproduction since it is related to population.

The Presidents and Secretaries of IUPS and IBRO met at the IBRO Congress in Montreal in August 1991 for their annual get together. Among topics of discussion were the IBRO symposium to be organized by B. Milner on Learning and Memory in Glasgow; the recommendation that one day on neuroscience be included in the pre-congress Teaching Workshop; contrary to an earlier announcement, the workshop in Kenya as a joint project will not occur in 1992.

The IUPS Secretary is to act as the IUPS representative to ICLAS.

It was agreed to go ahead with a new edition of the World Directory project only if the Treasurer can find a means to make it cost efficient.

The meeting ended in a general discussion of the relative priorities of the various IUPS activities. There was agreement that, in addition to promoting the advance of physiology generally through international contacts and collaboration, the IUPS had specific tasks in (i) improving the image of physiological research work, (ii) resisting fragmentation of physiology under the impact of specialization, (iii) developing international cooperation among physiologists where political barriers impede it, and (iv) helping to apply the results of physiological research towards a solution of the great problems of mankind.

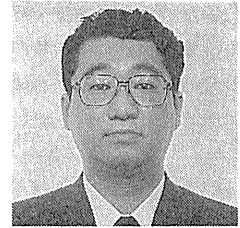
〔生理学の広場〕

「生理学者群像」

久 光 正 君

昭和大学医学部教授（第一生理学教室）

平成4年4月就任



① 現在の研究内容

東洋医学，特に鍼灸治療の作用機序を生理学的観点から解明することを目指し，侵害刺激により誘起される反射が末梢の特定部位の刺激により抑制される現象の中樞機序を研究してきた。また近年は運動負荷により生じる筋硬度の増加を筋硬度計を用いて測定し，末梢の刺激による変化とその機序についての研究や中枢神経や末梢の刺激の免疫への影響に関する研究が進められている。

② 将来の研究活動の抱負

東洋医学ではしばしば「気」という術語を病態や治療の表現に用いるがこれに符合する術語や考え方が西洋医学には見あたらない。「気」が単なる東洋医学的

概念なのか，あるいは何らかの客観性を備えたものなのか，「気」と関連ある現象はどのようなものか等を検討し，東洋医学の理解をすすめていきたい。

③ 生理学教育に対する意見

医師として必要とされる膨大な医学知識をすべて教授することは六年間の一貫教育をもってしても容易ではない。綿密なカリキュラム編成と共に，知識の断片の羅列ではなくむしろ原則的な考え方を身につけさせるようにする姿勢が大切であると考えている。生理学教育においても先達が行なった実験結果からどのようにして原則がひきだされたかを講義の中で示し，また基本的な生理学知識を実習により体験させ，問題解決能力が育まれるよう努力したい。

〔日本学術会議だより〕

学術国際貢献特別委員会設置される

平成4年5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，去る4月15日から17日まで第114回総会（第15期3回目の総会）を開催し，新たに「学術国際貢献特別委員会」を設置しました。今回の日本学術会議だよりでは，同総会の議事内容及び3月に開催された AASSREC 執行委員会等についてお知らせいたします。

旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（会長談話）

平成4年2月25日

日本学術会議

会長 近藤次郎

ソ連邦が解体したことに伴い，旧ソ連邦における多くの科学者は，研究の継続が困難となり，研究組織も

崩壊の危機に直面していると伝えられており，これが事実とすれば，世界に与える影響は計り知れないものがあると思われる。

いうまでもなく，人類の進歩にとって科学の向上発展は不可欠のものであり，その意味で，今日の旧ソ連邦の実情は憂慮に堪えないところである。

この際，我々日本の科学者は，学協会等を通じる等の方法で，旧ソ連邦の科学者に対し，能う限りの支援

を行う必要があると考える。

なお、旧ソ連邦の科学者と我が国の科学者との間の一般的な国際学術交流・協力をより一層充実するための方策等については、我が国の学術の分野における国際貢献の一環として、日本学術会議において引き続き検討することとしたい。

(注)本談話は、日本学術会議において国際交流・協力問題について調査・審議を行っている第6常置委員会から2月14日(金)の連合部会に問題提起され、各部会で検討され審議を経た後、2月25日(火)の第785回運営審議会に提案され審議されたものである。

日本学術会議第114回総会報告

日本学術会議第114回総会(第15期3回目の総会)は、4月15日～17日の3日間開催された。

第1日(4月15日)の午前。まず、会長からの前回総会以後の経過報告及び各部・各委員会等の報告が行われた。次いで、今回総会に提案されている2案件について、それぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。

第1日の午後、各部会が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件の審議が行われた。

第2日(4月16日)の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営について(申合せ)の一部改正」が採択された。これは、「副会長世話担当研究連絡委員会運営協議会」という名称を「複合領域研究連絡委員会運営協議会」に改めるとともに、運営協議会のより円滑な運営を図るために、必要な措置を講じたものである。

次いで、「学術国際貢献特別委員会の設置について(申合せ)」が採択された。これは、学術の分野における我が国の国際貢献の在り方について検討するための特別委員会を設置したものである。

なお、審議・採決の終了後、さきに会長談話として発表した「旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について(平成4年2月25日)」に関連して、旧ソ連邦の科学者の実情調査のために、当会議からロシアに派遣された第6常置委員会幹事の宅間会員から、その調査結果について報告が行われた。

第2日の午後、各部会が開催され、各部における懸案事項について審議が行われた。

第3日(4月17日)午前には、各常置委員会が、午

後には、各特別委員会がそれぞれ開催された。

学術国際貢献特別委員会の設置

本会議は、昨年10月に開催した第113回総会における内閣官房長官から学術の分野における我が国の国際貢献の在り方についての検討依頼を踏まえ、今回の第114回総会において学術国際貢献特別委員会を設置した。

AASSREC 執行委員会の開催

去る3月23日から26日にかけて4日間、AASSREC (Association of Asian Social Science Research Councils) 執行委員会が日本学術会議の会議室で開催された。外国代表団は前AASSREC会長で現副会長のR・トリニダード教授(フィリピン社会科学協議会)、同じく副会長代行のJ. J. スモリッツ教授(オーストラリア社会科学アカデミー)、AASSREC事務局長のD. N. ダナガーレ教授(インド社会科学研究協議会)、同じく事務幹事のV. K. メータ博士(同上)のAASSREC側4理事と、タイ国バンコック駐在のUNESCO人間社会科学地域アドヴァイザーのY. アタール博士の5名。

日本側は、現AASSREC会長の川田 侃日本学術会議副会長のほか、来年9月に川崎市のKSP(神奈川サイエンス・パーク)で日本学術会議が共催して開く予定の「AASSREC第10回日本総会」の組織運営委員会委員長山田辰雄教授(慶応義塾大学、アジア政経学会理事長)、同事務局長、平野健一郎教授(東京大学、アジア政経学会前理事長)、及び日本学術会議AASSREC専門委員会幹事浦田賢治会員(第2部)の3名がオブザーヴァーの資格で参加、連日、時間を惜しむかのように、AASSRECの運営や来たるべき第10回総会の打合せなどについて、熱心な討議が続けられた。

また討議の合間を縫うようにして、外国代表団は近藤次郎日本学術会議会長表敬訪問、日本学術会議運営審議会における挨拶などのほか、川崎市にも赴き市長表敬訪問、KSP視察などを精力的に行った。日本学術会議も、近藤会長主宰のレセプションを催し、関係諸国の東京駐在大使館スタッフなどを招いて、アジア・太平洋地域における学術交流と発展のための意見交換の場を設け、友好的な雰囲気なかで談論が風発、至るところで談笑の花を開いた。

AASSRECはアジア・太平洋地域の社会科学領域における国際学術上部組織で、いわゆるアンブレラ・オ

ーガニゼーションである。1973年にインドのシムラで「社会科学の教育・研究に関するアジア会議」が開かれた際に設立が合意され、それ以来 UNESCO の協力のもとに発展を遂げてきた。AASSREC は加盟各国それぞれの文化的伝統を尊重しつつ、社会科学の研究、教育、知識の普及などを促進することを通して、この地域における社会科学の発達を図ることを目的に、加盟諸国の社会科学協議会、またはこれに類する団体（1国1会員）により構成されている。

加盟国はオーストラリア、インド、中国、ニュージーランド、フィリピンなど、1991年8月現在、15カ国であるが、国（くに）会員のほかに、準会員の制度もあり、将来この地域の各国の学協会や研究所等が準会員として AASSREC の活動に参加する道も開かれている。出版活動としては、隔年に開催される総会における諸報告やシンポジウムなどの出版のほか、定期刊行物「aassrec panorama」が年2回出されている。

AASSREC には最高決定機関である総会のほかに、会長、副会長（2名制）、事務局長の4名で構成される理事会が置かれているが、これにさらに UNESCO の地域アドバイザーが加わって開かれる執行委員会に事実上の運営権限があるように見える。今回、日本学術会議で開かれた会議は AASSREC としては極めて重要な会議であったといえる。AASSREC は UNESCO によって承認された「非政府機関（NGO）」の地位をもち、絶えず UNESCO と緊密な関係を保っているが、同じく UNESCO によって承認された NGO の地位をもつ IFSSO（国際社会科学団体連盟）とも相互協力関係にある。

平成4年（1992年）度共同主催国際会議

日本学術会議では、我が国において開催される学術関係国際会議のうち毎年おおむね6件について、学・協会と共同主催している。

本年もまた、6件の国際会議を共同主催することとしており、その概要は、次のとおりである。

◆第5回世界臨床薬理学会議（7月26日～31日）

この会議は、臨床薬理学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市（横浜国際平和会議場）において開催される。

参加予定人数は3,000人（国外1,500人、国内1,500人）、参加予定国数は49か国。

◆第14回国際平和研究学会総会（7月27日～31日）

この会議は、平和学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館及び立命館大学）において開催される。

参加予定人数は450人（国外250人、国内200人）、参加予定国数は45か国。

◆第8回国際バイオレオロジー会議（8月3日～8日）

この会議は、バイオレオロジー学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市（横浜国際平和会議場）において開催される。

参加予定人数は500人（国外150人、国内350人）、参加予定国数は26か国。

◆国際地質科学連合評議会及び第29回万国地質学会議（8月24日～9月3日）

国際地質科学連合評議会は、同連合の最高決定機関であり、運営事項を協議、決定することを目的とするものである。また、万国地質学会議は、地質学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館）において開催される。

参加予定人数は5,300人（国外3,200人、国内2,100人）、参加予定国数は94か国。

◆第9回国際光合成会議（8月30日～9月5日）

この会議は、光合成に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として名古屋市（名古屋国際会議場）において開催される。

参加予定人数は1,000人（国外500人、国内500人）、参加予定国数は41か国。

◆第11回国際光生物学学会議（9月7日～12日）

この会議は、光生物学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館）において開催される。

参加予定人数は1,000人（国外600人、国内400人）、参加予定国数は52か国。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会

電話 03 (3403) 6291

〔日本医学会だより〕

日本医学会だより No. 7

1992年6月 No. 7

森会長就任挨拶

日本医学会は過去8年間、太田会長のもとで着実な発展を遂げてきた。そしてその根底には、日本医学会の性格を明確にされたこと、また、日本医師会との協調を図りつつ独自の方針を貫かれたことなどの卓越した基本方針の存在をうかがい知ることができる。

ひるがえって目を外に向けてみると、日本医学会に対する社会からの期待が想像以上に大きいことをひしひしと実感する。今日の状況は、広く医学や医療をめぐる起こりつつある諸問題について、日本医学会がどのような姿勢で、どのように行動していくかを考えていかなければならない時期に来たものと認識している。

今後、阿部・小泉・石田各副会長をはじめとする役員の方々と緊密な連携をとりながら、諸事業に取り組んでいく所存である。各分科会会員諸氏からも一層のご支援・ご協力をお願いしたい。

I. 第20回日本医学会幹事会

1992年2月25日(火)、午前10時30分から日本医師会館の会議室で行われた。主として第59回定例評議員会に提出する議題の内容が検討され、その結果、以下の議題が提出されることになった。①1991年度年次報告、②1992年度事業計画、③日中医学交流について、④認定医について、⑤会長・副会長・幹事(一部)の選挙。

なお、本幹事会では、報告事項として以下の項目について説明された。①第24回日本医学会総会について、②特別シンポジウムの検討委員会について、③日本医学会シンポジウムについて、④医学用語について、⑤日中医学大会について、⑥認定医について。

また、次期会長・副会長・幹事選挙について若干の協議が行われた。

II. 第59回日本医学会定例評議員会

1992年2月25日(火)、午後1時30分から日本医師会館3階小講堂において第59回日本医学会評議員会が開催された。太田会長の挨拶に続き、以下の議題が取り上げられた。

報告事項として、①1991年度年次報告、②第24回日本医学会総会の準備状況。

協議事項として、①1992年度事業計画、②会長・副会長・幹事の選挙、③その他。

なお、内容詳細は次のとおりである。

1. 日本医学会役員改選

本評議員会において会長以下の役員選挙が行われ、会長に森 亘(新)、副会長に阿部正和(再・臨床部門)、小泉 明(再・社会部門)、石田名香雄(新・基礎部門)の各氏が選出された。任期は4月1日から1994年3月31日迄である。

また、幹事の選挙が2部会で行われ、萬年 徹(新・第5部会)、大越正秋(再・第6部会)の両氏が選出された。任期は4月1日から1996年3月31日迄である。

その後4月3日に行われた新会長・副会長による第1回協議会で、以下の各氏が会長指名幹事として任命された。三浦祐晶(再)、久道 茂(新)、草間 悟(新)、飯島宗一(再)、井村裕夫(再)、森 武貞(再)、井口 潔(再)の7名である。任期は、1996年3月31日迄である。この結果、幹事は非改選者も含め合計16名となった。

2. 日中医学大会

1991年12月、中華医学会から日本医学会に対し、北京で日中国交回復20周年の日中医学大会を開催したい旨の申し入れがあった。

これに対し日本医学会としては、主催者として名前を連ねることは了承するが、実質的な運営には参加できないので、日本側の主体は日中医学協会とすること。また、費用の負担は、すでに本年度予算が確定している等の問題もあり、日本医学会としては出費不可能であると回答し、中華医学会もこれを了承した。ま

た、太田前会長から各分科会に対する協力要請が行われた。

3. 第24回日本医学会総会の準備状況

第24回日本医学会総会の飯島宗一会頭ならびに齋藤英彦準備委員長から、1995年4月7、8、9日の3日間、名古屋市を中心に開催が予定されている上記総会の準備状況が報告された。

基本テーマは「人間性の医学と医療」、サブタイトルは「生命の世紀をひらく」となったこと、またシンボルマークも紹介された。総会準備の役員もほぼ決定し、総合展示、学術プログラム等についての基本的な考え方も報告された。

4. 医学用語管理事業

医学用語管理委員会の草間委員長から、昨年4月に完成した『医学用語辞典 英和』に引き続き、和英版も1993年の半ばまでには完成する予定であることが併せて報告された。

また、外科系の16学会から日本医学会宛に用語の統一について要望が来ている点にも触れ、委員会としてもこの問題に積極的に取り組む考えであることを明らかにした。

5. 認定医

日本医学会は日本医師会と学会認定医制協議会に呼びかけて「認定医制についての三者懇談会」を主宰している。この懇談会について、太田会長から、1990年度から1991年度の初めの頃までは制度の検討など順調に進展してきたものの、以後、標榜科目との強い関連が生じてからは、必ずしも議論が進展していない。と

いう感想が述べられた。

6. 複写権センター

日本工学会を中心として学協会著作権協議会が複写権センター設立の努力を続け、ようやく昨年、同センターが設立された。日本医学会も運営資金を出資して運営の中心的な団体の1つとなるよう要請されたが、諸々の事情により、現在はまだ参加していない。日本医学会としては、同センターへの加盟については各分科会の判断に一任している。

Ⅲ. 日本医学会シンポジウム

＜第94回シンポジウム＞

◆免疫学の進歩—自己免疫を中心に—
1992年6月19日(金) 日本医師会大講堂
組織委員：尾形悦郎、狩野庄吾、谷口 克

＜第95回シンポジウム＞

◆小脳—新しい治療法をめざして—
1992年7月31日(金)～8月2日(日) 箱根
組織委員：野々村禎昭、伊藤正男、吉田充男
(但し、クローズドで行われる)

Ⅳ. 特別シンポジウム検討委員会

本委員会は昨年10月に設置され、以後3回の討議を経て、概要次のような報告をまとめた。

①医学会総会の中間年に開催、②東京、京都、大阪、名古屋以外の地域で開催、③テーマは狭義の「医学」に限定せず、「医学の存在意義」「医学哲学」などを模索していく、等である。

【お知らせ】

上原記念生命科学財団

平成4年度上原賞(研究業績褒賞)受賞候補者推薦要項

1. 候補者

生命科学、とくに健康の増進、疾病の予防および治療に関する次の分野において、独創的な内容の研究に従事し、本分野の研究の進展に顕著な功績をあげ、活躍中の研究者(共同研究の場合は主たる研究者を対象とするが、異なる研究グループによる共同研究の場合には、連名であってもよい)。

(1)栄養学、(2)薬学一般、(3)基礎および臨床医学(東

洋医学を含む)、(4)社会医学(体力医学を含む)

2. 推薦者

- (1) 主要学会に推薦を依頼する。
- (2) 既上原賞受賞者に推薦を依頼する。
- (3) 当財団の役員および評議員に推薦を依頼する。

3. 推薦件数

1推薦者から1件とする。

4. 褒賞の方法

1件につき、正賞(金牌)および副賞1,000万円を贈呈する。2件以内。

5. 名 称

この褒賞は「上原賞」(英文名“Uehara Prize”)と呼称する。

6. 推薦方法

所定の用紙に記入し、当財団に送付する。

7. 推薦締切日

平成4年9月10日とする。

8. 選考方法

当財団選考委員会において選考し、理事会・評議員会で決定する。

9. 褒賞の贈呈

平成5年3月11日の贈呈式において贈呈する。

10. 推薦用紙送付先および連絡先

財団法人 上原記念生命科学財団
〒171 東京都豊島区高田3丁目25番3号
電 話 03-3985-3500

平成4年度(第9回)井上学術賞候補者推薦要項

財団法人 井上科学振興財団

1. 候補者の対象

自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績をあげた研究者。

ただし、年齢が平成4年9月21日現在で満50歳未満の研究者に限ります。

2. 学 術 賞

本賞：賞状及びメダル 副賞：200万円

授賞件数は5件以内とします。

(注)受賞者は、原則として1件について一人とします。特に複数であることを必要とするときは、それらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合についても1件として取り扱います。

3. 推薦件数

各推薦者から1件とします。

4. 推薦依頼先

下記の26学会並びに当財団の役員・評議員に推薦を依頼します。

5. 提出方法

所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当財団あてに提出願います。

6. 締切期日

平成4年9月21日(月)

7. 選考方法

当財団の選考委員会において選考し、理事会におい

て決定します。

8. 学術賞の贈呈

平成5年2月4日(木)の予定

(選考の結果は、平成4年12月中旬に推薦者へお知らせします。)

9. 推薦書提出先及び連絡先

財団法人 井上科学振興財団
〒150 東京都渋谷区猿楽町11番20号
電 話 東京 03-3477-2738
F A X 03-3477-2747

日 本 数 学 会	日 本 分 子 生 物 学 会
日 本 化 学 会	電 気 学 会
日 本 気 象 学 会	高 分 子 学 会
日 本 人 類 学 会	日 本 薬 理 学 会
日 本 植 物 学 会	日 本 薬 学 会
応 用 物 理 学 会	日 本 物 理 学 会
日 本 金 属 学 会	地 球 電 磁 気・
日 本 生 理 学 会	地 球 惑 星 学 会
日 本 病 理 学 会	日 本 地 質 学 会
日 本 応 用 数 理 学 会	日 本 動 物 学 会
地 震 学 会	日 本 生 化 学 会
日 本 天 文 学 会	電 子 情 報 通 信 学 会
日 本 遺 伝 学 会	日 本 農 芸 化 学 会
	日 本 解 剖 学 会

平成4年度(第14回)沖縄研究奨励賞候補者推薦応募

推薦応募開始：平成4年7月15日
 推薦応募締切：平成4年9月30日(当日消印有効)
 受賞者発表：平成4年12月10日
 贈呈式・受賞者記念講演：
 平成5年1月下旬，那覇市内で開催

問い合わせ先：〒100 東京都千代田区永田町1-4-10
 (財)沖縄協会
 ☎ 03-3580-0641
 「沖縄研究奨励賞」係

第1回日本バイオイメーキング学会学術集会

日時：1992年10月16日(金)
 会場：国際研究交流会館 国際会議場
 東京都中央区築地5-1-1
 国立がんセンター内
 電話 03-3543-0332
 主 題：医学・生物学の分野では，分子レベルでの研究に加え，データの視覚化，画像化による解析がますます必要とされて来ています。
 本学術集会(画像解析シンポジウム)では，
 (1) 生体の動きのリアルタイムでの視覚化
 (2) 細胞内分子の動的変化，代謝・エネルギー変換の視覚化
 (3) 生体分子の物理化学的性質の解析画像
 (4) 分子のモデリング，ドラッグデザイン

に関する特別講演と一般講演とを行いません。一般講演を広く募集いたしますので，ふるってご応募下さい。

講演申込締め切り：1992年7月31日(金)消印有効
 講演要旨締め切り：1992年9月10日(木)

参加費(含む要旨集代)：一般4,000円 学生2,000円
 懇親会費1,000円(当日支払)

なお，当日会場にて日本バイオイメーキング学会の入会受付を致します。

申込および問い合わせ先：

〒467 名古屋市瑞穂区川辺通3-1
 名古屋市立大学薬学部
 中西 守
 電話 052-836-3411
 ファックス 052-836-3414

第8回神経研国際シンポジウム(神経研創立20周年記念)

Role of the Cerebellum and Basal Ganglia in Voluntary Movement

随意運動制御における小脳と大脳基底核の役割

日時：1992年11月17日(火)～19日(木)
 会場：アルカディア市ヶ谷(私学会館)
 千代田区九段北4-2-25
 プログラム：下記のとおり
 連絡先：(財)東京都神経科学総合研究所調査課
 ☎ 0423-25-3881 内線 4104
 申込方法：①所定の郵便振込用紙により事前に申込み下さい(参加費は5,150円)。

・一般参加は9月14日(月)締切
 ・ポスター発表希望者は8月31日(月)締切
 ②ビュッフェ形式の懇親会を開きます(会費は5,000円)。
 希望の方はシンポジウム参加とあわせてお申込み下さい。
 但し，ポスター発表者については懇親会費は不要です。

—1 st Day Nov. 17 (Tue), 1992—

Morning :

Session I. Overview on the cerebellum and basal ganglia.

- W. T. Thach, Jr. (Washington Univ., St. Louis, U. S. A.)
 K. Sasaki (Kyoto Univ., Kyoto, Japan)
 M. R. DeLong (Emory Univ., Atlanta, U. S. A.)

Afternoon :

Session II. Movement disorders.

- H. Narabayashi (Neurological Clinic, Tokyo, Japan)
 M. Hallett (NINDS/NIH, Bethesda, U. S. A.)
 R. Tanaka (TMIN, Tokyo, Japan)

Session III. Control of eye movements

- P. J. May (Univ. of Mississippi, Jackson, U. S. A.)
 N. Mano (TMIN, Tokyo, Japan)
 M. E. Goldberg (NEI/NIH, Bethesda, U. S. A.)
 O. Hikosaka (NIPS, Okazaki, Japan)

—2 nd Day Nov. 18 (Wed), 1992—

Morning :

Session IV : Control of limb movements : Basal ganglia

- M. Kimura (Osaka Univ., Osaka, Japan)
 W. Shultz (Univ. of Fribourg, Fribourg, Switzerland)
 G. E. Alexander (Emory Univ., Atlanta, U. S. A.)
 I. Hamada (TMIN, Tokyo, Japan)

Afternoon :

Session V : Control of limb movements : Cerebellum

- A. M. Smith (Univ. of Montreal, Montreal, Canada)
 J. R. Bloedel (Barrow Neurological Inst., Phoenix, U. S. A.)
 S. Kitazawa (Tokyo Univ., Tokyo, Japan)

Session VI : Control of limb movements : Thalamus

- H. Tokuno (Kyoto Univ., Kyoto, Japan)
 K. Jinnai (Shiga Univ. of Med. Sci., Ohtsu, Japan)
 M. E. Anderson (Univ. of Washington, Seattle, U. S. A.)

Poster Session

Evening : Buffet Party

—3 rd Day Nov. 19 (Thu), 1992—

Morning :

Session VII : Integration of the cerebellum and basal ganglia outputs.

- Y. Shinoda (Tokyo Med. & Dent. Univ., Tokyo, Japan)
 P. L. Strick (VA Medical Center, Syracuse, U. S. A.)
 K. Kawano (Electrotechnical Lab., Tsukuba, Japan)
 J. Tanji (Tohoku Univ., Sendai, Japan)
 M. Wiesendanger (Univ. of Fribourg, Fribourg, Switzerland)

Afternoon :

Session VIII : Models of motor control

- D. J. Brooks (Hammersmith Hospital, London, U. K.)
 M. Kawato (ATR Aud. & Vis. Percep. Res. Lab., Kyoto, Japan)
 E. E. Fetz (Univ. of Washington, Seattle, U. S. A.)

General Discussion

千里ライフサイエンスセミナー 老化と老年病(1)―最近の進歩―

- 日 時：平成4年11月27日(金)
午前10時～午後4時30分
- 場 所：千里ライフサイエンスセンタービル
ライフホール
(地下鉄御堂筋線千里中央駅すぐ)
(大阪府豊中市新千里東町1-4-2)
- 主 催：財団法人 千里ライフサイエンス振興財団
協 賛：株式会社 千里ライフサイエンスセンター
コーディネータ・座長：
大阪大学医学部教授 荻原俊男
大阪大学名誉教授 熊原雄一
- プログラム：
1. 老化の指標と老人の正常値
名古屋大学名誉教授(中津川市民病院院長) 葛谷文男
 2. 老化促進モデルマウス(SAM)
京都大学胸部疾患研究所教授 竹田俊男
 3. 老化と遺伝子発現制御
工業技術院微生物工業技術研究所首席研究官 三井洋司
 4. 老化、癌化とDNAのメチル化
東北大学医学部教授 小野哲也
 5. 早老症の分子遺伝学
大阪大学医学部講師 三木哲郎
- 受講料：(講演要旨集含む)
会 員(但し、大学、官公庁、当財団賛助会
員、主催・協賛団体会員) 5,000円
非会員 7,000円
学 生 3,000円
- 定 員：200名
- 参加申込方法：①氏名②勤務先、所属、役職名、所在地、〒、電話、FAX番号③振込予定日を明記の上、葉書またはFAXで下記宛お申し込み下さい。参加費は申込後に三和銀行本店営業部・普通預金 No. 1811008・財団法人千里ライフサイエンス振興財団口座宛開催日の3日前までにお振込下さい。なお振込の際振込者名の前にR1とご記入下さい。ご送金確認次第、領収書兼参加証を送付致します。
- 申 込 先：(財)千里ライフサイエンス振興財団
「老化と老年病」セミナー係
〒565 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル
TEL (06)873-2001
FAX (06)873-2002
担当：松尾・江口

第4回 バイオ素子国際シンポジウム

- 開催期日：平成4年11月30日(月)～12月2日(水)
- 開催場所：(宮崎市)サンホテルフェニックス
宮崎国際会議場
- 目 的：新機能素子研究開発に関与する国内外の研究者が一堂に会し、合宿形式により研究開発の現状、問題点、将来方向等について報告討論することによって、新機能素子研究開発の推進と技術情報の国際交流に資することを目的とする。
- 内 容：バイオ素子、分子素子、脳科学、ニューラルコンピューティングに関する最新の研究成果の発表とディスカッションを行う。
- 構 成：セッションはプレナリー講演のほか、大別して以下の2つのカテゴリに関した口頭発表およびビジュアル(ポスター)発表、ランプセッション等から構成される。
- ・学習と記憶
 - ・生体分子および合成分子の自己組織化
- 会議言語：講演、予稿集ともに英語。
- 論文募集：口頭発表は招待講演のみで、一般からの講演募集は行わない。
- ビジュアル・プレゼンテーション(ポスター発表等)は、広く一般からの論文を募集。
- 学会参加費：一 般 45,000円

大学および公的機関 40,000円
 開催案内: 1st Circular 希望者は、下記まで連絡して
 下さい。
 事務局: 〒105 東京都港区虎ノ門4-1-21
 葺手第2ビル

(財)新機能素子研究開発協会
 バイオ素子研究開発課
 小林敏昭
 TEL 03-3434-3871
 FAX 03-3434-7320

1993年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の 受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、1990年3月に本会を母体として新設された、公益信託「女性自然科学者研究支援基金」(受託者東洋信託銀行株式会社)から支出されます。

つきましては、下記の要領により、受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞:

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50才未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。

4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績文献リスト、及び、主な論文別刷10編程度をそえて、本会事務所までお送りください。

5. 締切は1992年11月末日(必着)。

6. 第13回の賞贈呈式は、1993年5月、東京において行なう予定です。

研究助成:

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者(各締切日において満40才未満)の略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
4. 締切は1992年11月末日と、1993年4月末日の2回。

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455(FAX兼用)

第16回 日本神経科学学会

会期: 平成4年12月8日(火)~12月10日(木)

会場: 千里ライフサイエンスセンタービル

(豊中市新千里東町1-4-2)

演題締切: 平成4年8月10日(月)

連絡先: 〒565 吹田市山田丘1-8

大阪大学歯学部薬理学教室

猪木令三

TEL 06-876-5711

FAX 06-876-3257

「日中医学大会1992」

日本医学会 日中医学協会

この度中華医学会より日中医学協会等に、国交正常化20周年を記念し1992年11月、北京において「日中医学大会1992」を開催したいとの申し入れがありました。

これらにつき賛同を求められた日本医学会では検討の結果、中華医学会と共に主催者として名を連ねる事に決定いたしました。

詳細は各学会事務局または日中医学協会にお問い合わせ下さい。

1. 主催 中華医学会 (陳 敏 章会長)
日本医学会 (森 亘会長)

2. 日程

(1) 学術交流

期間 11月1日(日)～11月5日(木)の間の適当な日程

日程、テーマ、座談会、病院見学等運営については、日程とあわせ日中の専門学会間で打ち合わせ中です。

会場 中国北京市 国際会議センターその他

(2) 「日中医学大会1992」記念式典

11月3日 於 人民大会堂

14:00 主催者挨拶

特別講演

中国側2題 吳 階平 曹 澤毅

日本側2題 岡本道雄 杉村 隆

アトラクション

18:00 レセプション

3. 事務局

中国側；中華医学会対外連絡部

「日中医学大会1992」秘書処

北京市東四西大街42号

電話 001-861-554744

F A X 001-861-5123754

日本側；財団法人 日中医学協会

東京都千代田区美土代町11-2

第一東英ビル

電話 03-3291-9161

F A X 03-3291-9164

4. 取扱い旅行社

JTB団体旅行日本橋支店 担当 藤田、臼井、小坂

住所 〒103 東京都中央区日本橋1-13-1

電話 03-3271-0991～3

F A X 03-3274-0408

北京市内ホテルの手配その他視察旅行は

西安・上海・桂林・広東・ハルビンを中心

に実施いたしますが、他にご希望がご

ざいましたらお申しつけ下さい。

第31回国際臨床視覚電気生理学学会 (第2回案内)

The XXXI Symposium of the International Society
for Clinical Electrophysiology of Vision, ISCEV

日時：平成5年(1993)5月25日(火)～29日(土)

会場：日本エアロビクスセンター・長柄

「ふるさと村」研修センター

千葉県長生郡長柄町上野526-8

TEL 0475-35-3391

会長：千葉大学医学部眼科 安達恵美子

スケジュール(予定)：

5月25日(火) 登録、理事会、歓迎パーティ

5月26日(水)

主題1. 「retinal degeneration」

4時運動会(スニーカーを御用意下さい)

garden party(プールサイドにてバーベキュー)

5月27日(木)

主題2. 「topography and origins of ERG」

親善旅行(成田山新勝寺、国立歴史民族博物館)

5月28日(金)

主題2. 「topography and origins of VECP」

シンポジウム 1. 「corneal transplantation and electrophysiology」

シンポジウム 2. 「senior ISCEV」

ISCEV 総会, 晩餐会

5月29日(土) free papers

poster session は26日を予定

topic areas : 1. Retinal degeneration

2. Topography and origins of ERG and VECF

Symposium : 1. Corneal transplantation and electrophysiology

2. senior ISCEV (HE Henkes, M Nagata, A Nakajima, NW Schweitzer, LH van der Tweel)

invited lectures :

Fishman 教授(イリノイ大学)

Oakley 教授(イリノイ大学)

Heckenlively 教授(カリフォルニア大学
ロスアンジェルス校)

Lehmann 教授(チューリッヒ大学)

Lachapelle 教授(マッギール大学)

Kafka-Lutzow 教授(ウィーン大学)

金子教授(慶応大学)

事務局 : 〒260 千葉市中央区亥鼻1-8-1

千葉大学医学部眼科 柿栖米次

TEL 043-222-7171

FAX 043-227-1810

(平成4年4月29日より制令都市指定により住所・電話, FAX番号が変更になりました。)

第11回嗅覚・味覚国際シンポジウムのお知らせ

(11th International Symposium on Olfaction and Taste)

日時: 1993年7月12日(月)~16日(金)

場所: 北海道厚生年金会館

(〒060 札幌市中央区北1条西12丁目)

発表申込及び要旨メグ切: 1993年1月31日

第11回嗅覚・味覚国際シンポジウムが, 上記の要領で開催されます。このシンポジウムでは, 特別講演, セッションシンポジウム, 一般口演, ポスター講演が行われます。セッションシンポジウムでは, 次の19のテーマが取りあげられます。

1. 味蕾および嗅上皮の構造と機能
2. 味覚・嗅覚の情報変換に関与する機能分子
3. 味覚・嗅覚の情報変換に関与するイオンチャンネル
4. 味物質および味覚リセプタの生化学と分子生物学
5. 化学感覚の遺伝学と分子神経生物学
6. 味とにおいの精神物理学
7. 食物におけるフレーバー化合物: 化学構造-感覚機能の相関関係
8. うま味: 生理, 栄養, 食品
9. 食物認知の脳内機構

10. 味覚・嗅覚情報の脳内処理機構
11. 化学感覚の学習-記憶に関する脳機構
12. 味覚障害の治療のための臨床検査法
13. 老化と味覚感度
14. 嗅覚障害の治療のための臨床検査法
15. 老化と嗅覚感度
16. 人間の嗅覚・味覚の無侵襲計測
17. 人工化学センサー
18. 昆虫の化学受容と行動発現
19. 水生動物の化学受容

なお, このシンポジウムは, 第27回日本味と匂のシンポジウムと合同で行います。嗅覚と味覚に関心を持っておられる多数の方が, このシンポジウムに発表・参加されることを期待しています。First Circular は下記にご請求下さい。

〒060 札幌市北区北12条西6丁目

北海道大学薬学部内

第11回嗅覚・味覚国際シンポジウム

組織委員長 栗原 堅三

TEL 011-709-6720

FAX 011-717-3267

日本生理学会会費払込みについてのお願い

平成4年度会費7,000円他, 未納の方には振替用紙を添付してあります。ご多忙のところお手数ですが, お払込み下さいますようお願いいたします。所属, 住所, 留学などご変更の場合はその旨ご連絡下さい。

尚 JJP の購読料を間違えて生理学会会費と一緒に払込まれる方がおられますが, JJP は日本学会事務センター扱いで, 本会とは異なります。お間違いのないようよろしくお願いいたします。

日本生理学会

〒113 東京都文京区本郷3-30-10 布施ビル
電話 (03) 3815-1624
振替口座東京 3-86430

日本生理学会評議員 名古屋藝術大学教授 葛野 浩君は、平成4年1月9日にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

日本生理学会評議員 特別会員 京都府立医科大学名誉教授 勝 義孝君は、平成4年7月20日にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

〔編集後記〕

5月の大型連休から夏休暇までの間は、事の外時間の長さが感じられる。中間に梅雨という外的環境が精神心理作用に大きな負の因子となるからであろう。夏休暇になっても、内容的には繁忙の癒よせが強い。とりわけ夏休暇の前は、カレンダーを前に気ぜわしく感ぜられる一時ではなからうか。

例年ながら7号の編集には、編集資料の不足で苦勞する。予め準備はしているものの、原稿は人間の創造性の所産であり、気ぜわしい中での能率低下、これが

予定の期限を超過することにもなる。本年も7号の編集会議は厳しかった。

7月号の遅れは、日本生理学会大会第二報が予定通り、全会員にアナウンスされないことを意味する。遅れを考慮して、日本生理学会大会第二報は、6月号に掲載して会員への情報伝達に齟齬がないようにした。

編集会議の結果、原稿の不足を「日本生理誌編集の10年」と題する私の編集責任者としての執筆を強いた。そのため、本号も同月同号の原則を破る結果を招いてしまった。

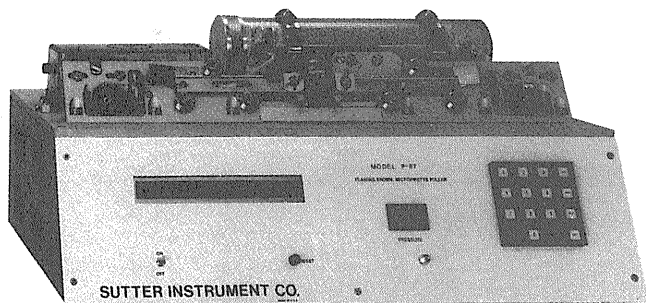
(酒井敏夫)

— 編 集 委 員 —

酒 井 敏 夫(幹 事)	松 井 洋 一 郎	野 口 鉄 也
野 村 正 彦	神 田 健 郎	内 野 善 生
藪 英 世(北海道)	丹 治 順(東 北)	本 間 信 治(関 東)
松 波 謙 一(中 部)	藤 本 守(近 畿)	片 岡 喜 由(中・四国)
有 田 眞(九 州)		

サッター/マイクロピペット・プラー(微細電極作製器)

P-87

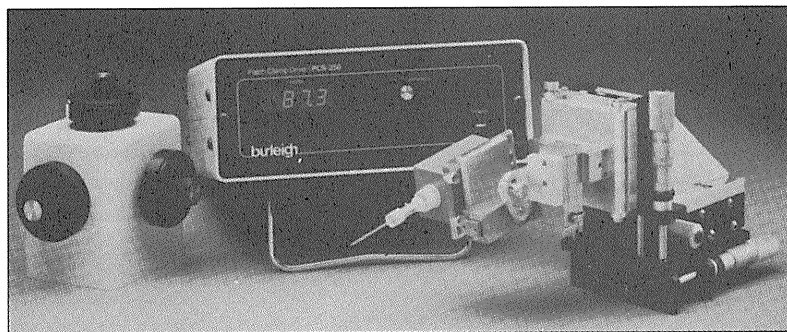


プラーにかけては世界にその名を馳せる
米国サッター社量産モデルの最高峰です。
世界の研究者から圧倒的な支持を受ける
抜群の信頼性は、他の追従を許しません。

- ◆ヴェロシティ・センサの搭載で、ガラスの粘度を検知。ヒータ温度、プル張力、冷却時間・エア圧とあわせ5次元コントロールを実現、比類ない再現性を獲得しました。
- ◆ルーピング機能を搭載し、短ターパー・大径チップのパッチ電極作製を最も得意とします。
- ◆ガラス管の素材・サイズ・厚さにかかわらず、最適のヒータ温度を瞬時に検出できる「ランプ・テスト」機構を装備。
- ◆最先端のマイクロプロセッサ・プログラムによって複雑なノウハウを身近なものにすると同時に、10ものプログラムを記憶します。

バーレイ/パッチクランプ・マイクロポジショニング・システム

PCS-1000



パッチクランプに不可欠の
絶対安定性と、数々の専用
機能を携えて、ついに上陸。

- ◆ドリフト・フリー、バックラッシュ・フリーの3次元ピエゾ駆動により、驚異的な安定性を獲得しました。
- ◆ヘッドステージを「クラムシェル方式」の回転体として電極の脱着を簡易化。交換後もポジションを再確保します。
- ◆オリンパス IMT-2、ニコン TMD 専用マウントを設定。

サッター社 日本総代理店
バーレイ社製 PCS-1000型 日本総発売元



ショーシンEM株式会社

〒444-02 愛知県岡崎市赤浜町蔵西1-14
ショーシンビル2F
TEL. 0564-54-1 2 3 1 FAX. 0564-54-3 2 0 7

バーレイ社 日本総代理店

MARUBUN CORPORATION
丸文株式会社

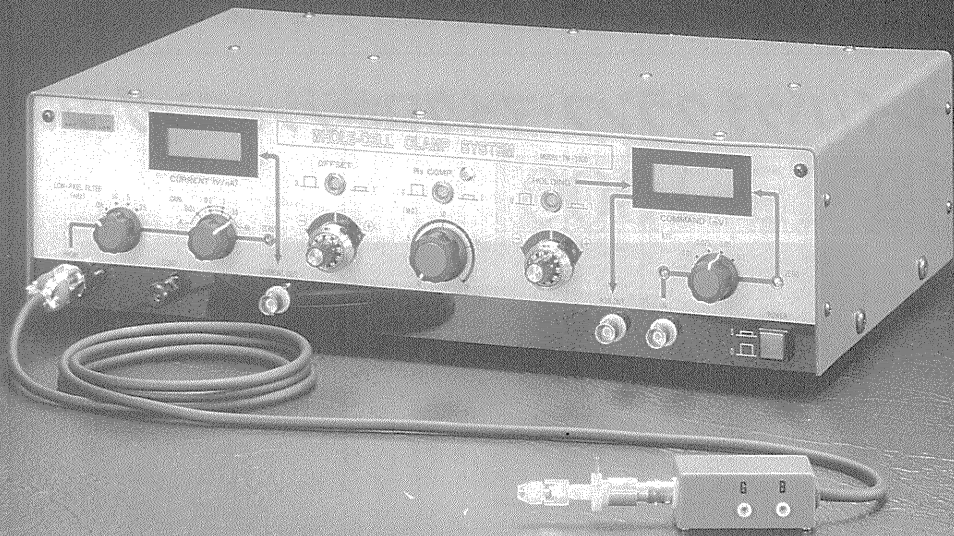
第4事業本部 電話 03 (3648) 9 3 1 8
営業第2部 FAX 03 (3648) 9 3 9 8
南砂事業所 〒136 東京都江東区南砂3-3-4

Whole-Cell Clamp System

MODEL

TM-1000

- 人間工学的なデザイン、簡便で確実な動作。
- 安全性の高い直列抵抗の補償。(Rs:0~20MΩ)
- ダイナミックレンジの大きなオフセット及びホールド電圧設定。



※2点支持タイプ(メカニカル ドリフト フリー)の電極ホルダー標準装備。

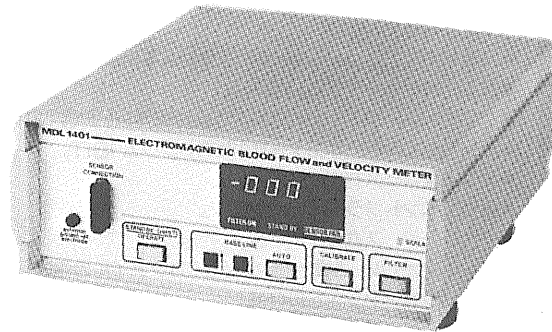


株式会社 アクトME研究所

〒173 東京都板橋区大谷口北町89-8-202 TEL:03-3554-5946

SKALAR サイン波 電磁血流計 MDL 1401

超小型軽量プローブにより、ラットの心拍出量から門脈、肝、腎動脈まで急性及び慢性実験用として安定した測定が可能となりました。



サイン波電磁血流計 MDL 1401

スカラー社製 サイン波電磁血流計 (MDL 1401) はサイン波励磁により、低雑音 (0.12 μ Vrms) 低ドリフト (2%以内) 及び超小型軽量プローブ (0.5mm ϕ) が可能となり、急性実験はもとより、慢性実験にも安定した測定ができる画期的な血流計です。

日本総代理店

LMS
Laboratory & Medical Supplies

株式会社 エル・エム・エス

デモのご依頼等、お気軽にご相談下さい。

〒113 東京都文京区湯島2-22-10 後藤ビル
☎ 03-3833-0910(代) FAX (03)3833-5910(代)

ラットから犬までの血圧を自動測定できます！

米国 NARCO 社製

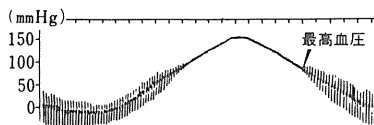
非観血式血圧測定装置

PE-300

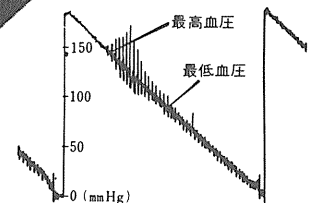
本装置は高感度トランスジューサーを用いてラット及びマウスの尾動脈よりパルスを検出し、非観血的に最高血圧を自動測定するものです。PE-300は発売以来、研究者の皆さまに好評を得ており、さらにアクセサリーを交換すれば各種動物の最高および最低血圧を自動測定できます。

■特徴

- ① マウス・ラットの最高血圧を簡単に測定できます。
- ② カフの交換により、犬・猿・人間等の最高血圧及び最低血圧の測定が可能です。
- ③ 本体は一般のチャート・レコーダ等にも容易に接続できます。
- ④ 極めて再現性の高い血圧測定装置です。



〈RATの血圧データ〉



〈DOGの血圧データ〉

株式会社 エル・エム・エス

〒113 東京都文京区湯島2丁目22番10号 後藤ビル
TEL (03)3833-0910(代) FAX (03)3833-5910(代)

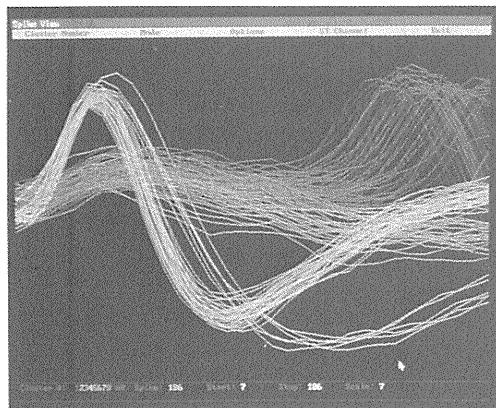
多チャンネル用
シングルユニット解析システム

Discovery™

BrainWave社製

Discovery(ディスカバリー)は、IBM-AT仕様のコンピュータを使った多チャンネル・シングルユニットの解析レコーディングシステムです。

オンラインでユニット信号を、Peak値、Vallay値、タイム、スパイクHigh等の8項目によりクラス分け(Cluster Cutting)します。分類したクラスは、後で様々な解析法で処理したり再分類できる画期的なシステムです。

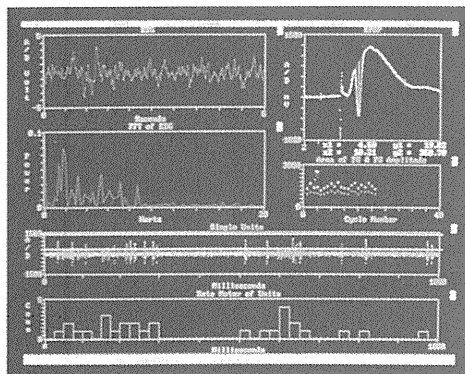


- 各種ヒストグラム、スパイクソート、アベレーシング等の解析処理の他に、TTL入出力により外部機器と連動させて測定できます。
- 25種類のスパイクソート・ライブラリーを用意。
- 交叉相関ヒストグラム(XCR)。
- ペリイベント・スティムヒストグラム(PETH, PSTH)。
- インタースパイク・インターバルヒストグラム ISIT。
- ジョイントヒストグラム。
- 各種イベントフラグのメッセージ。
- アベレージ、スパイクソート。
- カットファイル、各種データのASCIIファイルの作成。
- 波形パラメータリストの作成。
- ハードコピーに対応。
- Spike Channelは4ch/EEG、EMGの連続記録は6ch。
- プログラムのカスタムサイズも可能。

脳波及び生体信号記録解析システム(IBM-AT仕様)

Experimenter's WorkBench™

ワークベンチシステムは、EEG、ECG、EMG等のあらゆる生体信号を取り込み、オンラインで解析する優れたシステムです。豊富なコマンドファクションを持ち、順に組み合わせるだけでディスプレイ、演算処理、記録等の実験解析処理が自在で、作業系の自動化ができます。



《メインコマンド》

ACQUIRE	DISPLAY	ANALYZE
RECORD	STIMULATE	RESET
TIME	UP DATE	TEST
PAUSE	他数十種のファンクション	

《応用》

- シングルユニットの記録
- EMG、EKG、ERG
- EEGのFFT解析
- 心血管研究
- Evoked Potential
- Dose-Response Curve
- Synaptic potential
- 薬理学研究

BrainWave社
日本総代理店

BRC

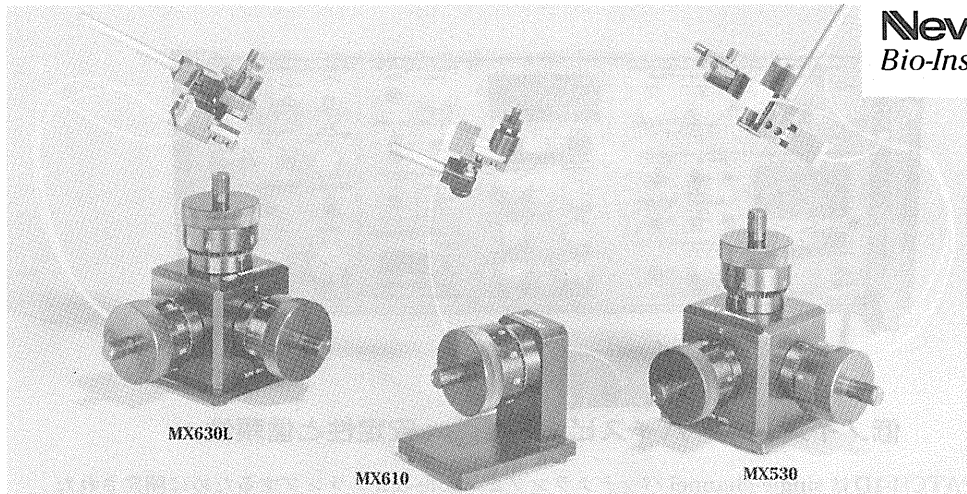
バイオリサーチセンター株式会社

本社：名古屋市東区東桜2-10-21(錦見ビル2F) ☎052(932)6421 FAX.052(932)6755
東京：東京都江戸川区東葛西5-1-15(第2頼長ビル403号) ☎03(3878)6471

水圧式マイクロマニピュレータ



Newport
Bio-Instruments

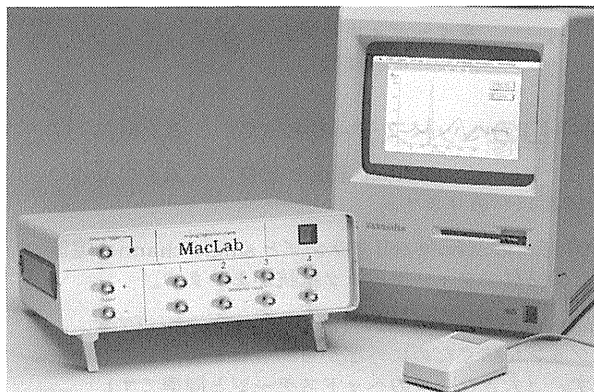


- コンパクトで遠隔操作型
- 低ドリフトで驚くべき安定性
- 高い分解能
- スムーズで応答性に優れた駆動
- 顕微鏡や粗動マニピュレータへのセッティングが簡単

ニューポート社の高性能、低ドリフト型MX-500及びMX-600シリーズの水圧式マイクロマニピュレータは、他社で見られる多くの技術的な問題点を解消しました。手動調節による駆動は円滑で応答性に優れ、Intracellularやパッチクランプの長時間記録をはじめ、マイクロインジェクションや超精密細胞刺入に理想的なマニピュレータです。同社独自の設計により定温下でのドリフトを $1\mu\text{m}/\text{時}$ 以下に抑え、精密なポジショニングが十分な駆動距離から得られます。水圧式のメリットは、油圧システムに比べ熱膨張率が2~3倍低い水の特性を利用したものです。

MacLab™ マックラブ システム

コンピューターコントロールによるデータの収集から解析、処理まで…… MacLabは単なるA-Dコンバーターではありません/ A-D、D-Aコンバータ、CPU、RAM、差動アンプを内蔵したインターフェイスです。



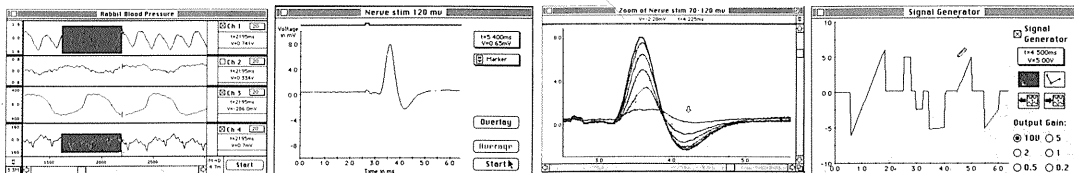
アナログデジタル Inst.

使いやすさで定評のあるマッキントッシュコンピュータシステムとの連係でデータの収集から処理までOK!

- ストレージスコープ、シンクロスコープ機能
- シグナルジェネレーター、スティムレーター機能
- オーバーレイ、多機能トリガー機能
- 多チャンネルチャートレコーダー
- X-Yレコーダー
- シグナルエディター
- スムース、微分、積分、その他

現在開発中

- 高速フーリエ変換(FFT)
- FFT & X-Yプロット
- インターバルヒストグラム等ニューロパッケージ



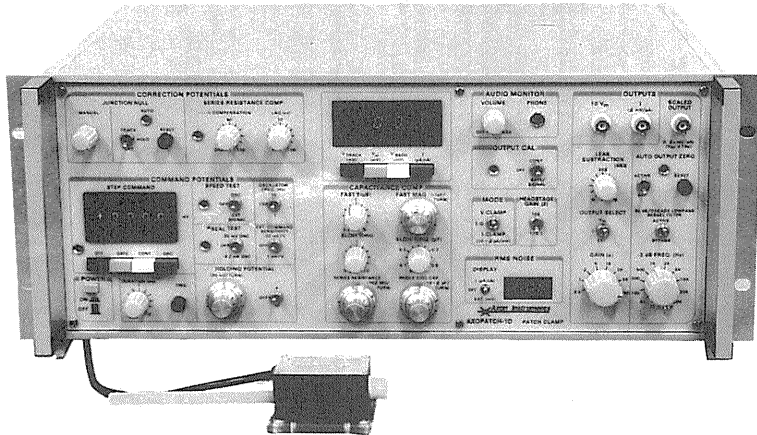
日本総代理店



バイオリサーチセンター株式会社

本社 名古屋市東区東桜2-10-21(錦見ビル2F) ☎052(932)6421 FAX 052(932)6755
東京 東京都江戸川区東葛西5-1-15(第2親長ビル403号) ☎03(3878)6471

AXOPATCH-1D PATCH CLAMP



低ノイズ ハイスピード 安定性と信頼性

AXOPATCH-1Dはsingle-channelパッチクランプとwhole-cellクランプするために開発された増幅器です。極めて低いノズル・レベルと素早い応答力を特徴としています。重要な部分はハイブリッド化により完全シールドされています。

AXOPATCH-1Dはボルテージクランプと同様にカレントクランプ・モードでも作動します。フィードバック抵抗は同じセルからsingle-channel電流とwhole-cell電流を記録するため、リモート・コントロールができます。

CV4ヘッドステージは下記の3種類があります。

AXOPATCH-1Dの特徴

- 使いやすい容量補償
- ラグ・コントロールつき直列抵抗補償
- コマンド電位発生器
- 接合電位除去
- RMSノイズモニター
- ZAP (パッチ膜破壊)
- 可変出力ゲイン
- DCオフセット除去
- 可変低域通過ベッセルフィルター
- シールテスト
- オーディオモニター
- 漏れ電流除去

AXOPATCH-1Dのヘッドステージ

CV4 1/100 whole-cellクランプ (20 nAまで) とsingle-channel電流を記録するためのものです。50 GΩと500 MΩのフィードバック抵抗があります。

CV4 0.1/100 大きなセル (200 nA; >>100 pF) の whole-cellクランプと single-channel電流を記録するためのものです。50 GΩと50 MΩのフィードバック抵抗があります。

CV4B 0.1/100 人工膜からsingle-channel電流を記録する為の特別なヘッドステージです。大きなコマンド電圧の間、サチレーションを防ぐために外部から50 GΩと50 MΩのフィードバック抵抗でコントロールできます。(大きなセルのヘッドステージと同型です)

西日本地区発売元



INTER MEDICAL CO., LTD.

株式会社 インターメディカル

本社/〒461 名古屋市東区葵一丁目25番1号
TEL (052) 937-7060 FAX (052) 937-5423
TLX 444-3603 WDMC J
東京支社/〒157 東京都世田谷区柏谷三丁目32番16号
製造営業部 アビタシオン千歳鳥山102号
TEL (03) 5384-6387 FAX (03) 5384-6487

東日本地区発売元

(Physio-Tech)

株式会社 フィジオテック

〒101 東京都千代田区内神田3丁目10番3号
コイダビル4F
TEL (03) 3258-1641(代)

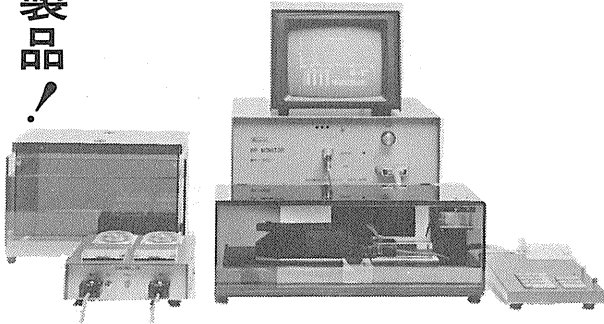
BP MONITOR MK-1000

マウス・ラット用

非観血式血圧測定装置

●収縮期血圧/●平均血圧/●拡張期血圧(計算値)/●脈拍数……を測定する

新製品!



- 特長
- ①カフの加圧、減圧により生ずる脈波の消失・出現・最大振幅を検出し、その時のカフ圧を記憶して、BP_s、BP_m、BP_d(計算値)を測定します。
 - ②操作は簡単で5つのモードを選択し測定します。
- | | | | | | | |
|------|----|-----|-----------------|-----------------|--------------------|----|
| モード1 | 自動 | 加圧時 | BP _s | — | — | HR |
| モード2 | 自動 | 減圧時 | BP _s | — | — | HR |
| モード3 | 手動 | | BP _s | — | — | HR |
| モード4 | 自動 | 減圧時 | BP _s | BP _m | (BP _d) | HR |
| モード5 | 手動 | | BP _s | BP _m | (BP _d) | HR |
- ③脈拍信号を音で聞くことができます。(音量調節可)
 - ④データは音の静かなサーマルプリンタにより打ち出され、測定データとその平均値の他に、日付、動物番号、体重、使用モードも印字されます。
 - ⑤アニマルホルダはダークブラウンのアクリルで出来ており、極力ストレスがかからないように工夫されています。
 - ⑥計測チャンバー内には糞尿受け用のプラスチックケースがセットされている為クリーニングが容易です。
 - ⑦RS232C出力が標準装備されています。

Muromachi

総発売元 **室町機械株式会社**

本社：〒103 東京都中央区日本橋室町4丁目2-1
 TEL 03(3241)2444 FAX 03(3241)2940
 大阪営業所：〒532 大阪市淀川区西中島5丁目7番19号
 TEL 06(302)1277 FAX 06(302)5026

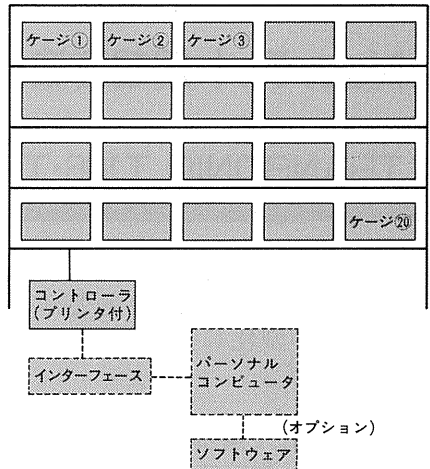
ホームケージ・アクティビティ システム

MODEL MK-3000

ラットを飼育ケージに入れたままの状態①自発運動量②飲水③摂食の3つの基本的な生活行動及び④立ち上がり行動を自動的に測定するために設計された装置であり、サーカディアン・リズムの研究に偉力を発揮します。

《主な特長》

- ケージの両サイドにフォトビームセンサーを内蔵したボックスが取り付けられており、動物の移動を検知します。また、センサーの高さは変更することができます。
- 飲水、摂食、立ち上がりの検出はそれぞれ専用のセンサーで行ないます。
- 飼育ケージにはステンレスケージを採用しており、排泄物は下のトレイに落ちるように設計されているので長期の測定にも支障をきたしません。
- 1台のインターフェースで20ケージ迄の測定ができます。
- 飼育室から離れた場所で計測ができます。(パソコンとインターフェースの最大距離は約1km)
- プリンタは標準装備されています。
- オプションとしてデータ集録・解析プログラム及びベリオドカルキ(周期計算プログラム)も用意されています。



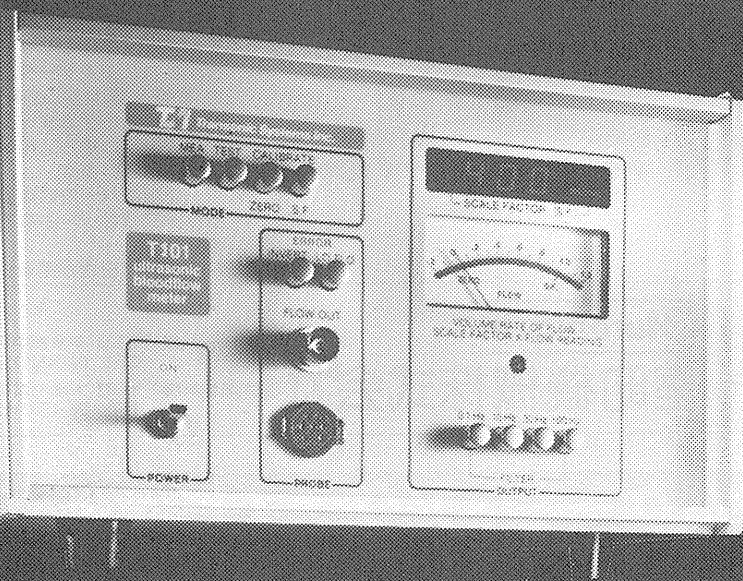
Muromachi

総発売元 **室町機械株式会社**

本社：〒103 東京都中央区日本橋室町4丁目2-1
 TEL 03(3241)2444 FAX 03(3241)2940
 大阪営業所：〒532 大阪市淀川区西中島5丁目7番19号
 TEL 06(302)1277 FAX 06(302)5026

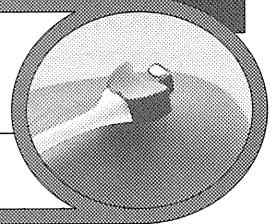


ラットの血管径0.5mmから 血流量測定が可能に!!



Newラット用超音波トランジットタイム血流計

TRANSONIC T106・T206



米国トランソニックシステムズ社では、小血管での血流測定の御要望に応えプローブの小型化に着手し、このたび実現いたしました。

〈特長〉

- 血管に対して無拘束で血流量(ボリュームフロー)が測定できます。
- 最小血管0.5mmφから測定が可能です。
- フルスケール5ml/minに対し、0.05mlの分解能があります。

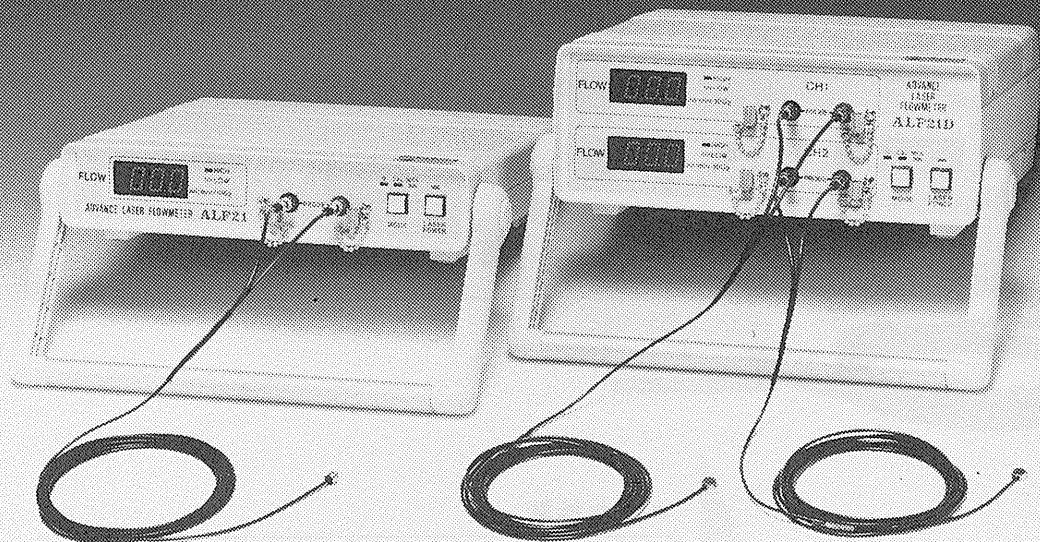
- ラットのMESENTERIC・A, RENAL・A及びFEMORAL・Aなどの小血管測定に最適です。
- 急性・慢性(埋め込み)での測定が可能です。
- 測定状態を知らせるメッセージ機能内蔵

お問い合わせは、ME事業部直通

TEL. (03) 3664-6271

アドバンスレーザー血流計

ALF21シリーズ



ALF21

(シングルチャンネルモデル、FLOW×1チャンネル)

ALF21D

(デュアルチャンネルモデル、FLOW×2チャンネル)

ALF21R

(リサーチモデル、FLOW、MASS、VELOCITY表示)

ALF21M

(モニターモデル、アラーム機能付)

特長

- ワイドダイナミックレンジなので測定レンジの切換えがいりません。
- レーザー光なので電磁ノイズの影響を受けません。
- マルチプローブ、温度センサー付プローブ等多くのバリエーションを準備し、幅広い用途への対応が可能です。

Advances in Advance Medicine... Advance Co., Ltd.

カタログ・資料請求及びデモ、試用の御要望は弊社ME事業部まで



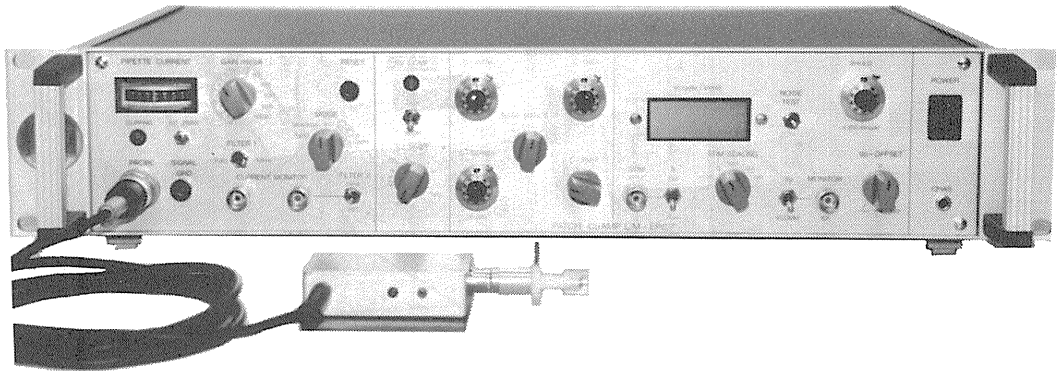
株式会社アドバンス ME事業部

〒103 東京都中央区日本橋小舟町5-7
TEL 03(3664) 6271 FAX 03(3667) 9523

実績 No.1!! F. J. Sigworth, E. Neher のオリジナル

西独リスト社

パッチクランプシステム *EPC-7*



■ 主な性能

- ノイズレベル (rms) : 0.05pA 1KHz, 0.30pA 3KHz
- 電流レンジ : 200pA (50G Ω), 20nA (500M Ω)
- 周波数応答 : 100KHz (500M Ω)
- 電位増幅度 : X10
- 測定モード : VC, CC, CC+COMM
- Rs補償 : 1-100M Ω
- 容量補償 : 0-10pF (First)
: 0.2-10pF, 2-100pF (Slow)
- ホールド電位 : ± 200 mV
- オフセット電位 : ± 50 mV
- コマンドレベル : 0, .1, .05, .001, -.1, -.05

日本総代理店/西日本地区発売元



ショーシンEM株式会社

〒444-02 愛知県岡崎市赤波町蔵西1番地14ショーシンビル
TEL(0564)54-1231(代) FAX(0564)54-3207

東日本地区発売元

(Physio-Tech)

株式会社 フィジオテック

〒101 東京都千代田区内神田3丁目10番3号コイダビル4F
TEL(03)3258-1641(代)

サヨナラ 紙記録。

★DATテープ1本に、最長120日間も連続記録。★##!

★それを、わずか2時間53分で高速再生。●*!!!

★トリガ/タイマ記録で、異常現象だけの自動記録もOK。!!!!

5881PCMデータレコーダは、DAT技術を応用した
PCM(パルス符号変調)方式のデータレコーダで、

★##! ●*!!! !!!!のほか、

▶ S/N比(信号対雑音比)は80dB(約10,000倍)を上回る素晴らしい精度。

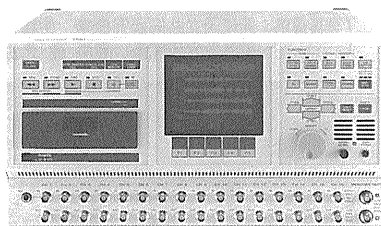
▶ パワフル&ユニークなメモリ波形表示で外部計測器不要。

▶ テープ交換中でも次のテープに記録。

▶ 見たいデータがすぐ見つかる縦横無尽のサーチ機能。

▶ ディジ・アナ混在記録。▶ 強力なGPIB。

などをはじめとする記録&解析にやさしい機能を、
このスペースでは書ききれないほど満載しています。



5881 PCM DATA RECORDER



●お問い合わせはお気軽に。
045-545-8111

エヌエフ

株式会社 エヌエフ回路設計ブロック

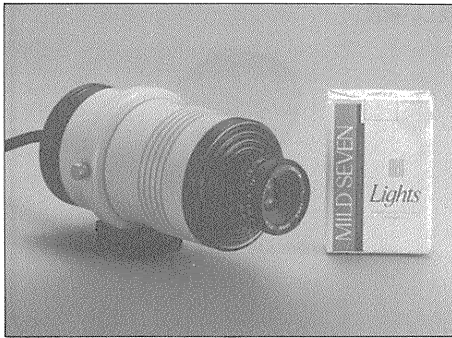
横浜市港北区綱島東5-3-20 〒223-0445 (545)8111 (営業直通)

顕微鏡用超高感度テレビカメラ

DAS-512

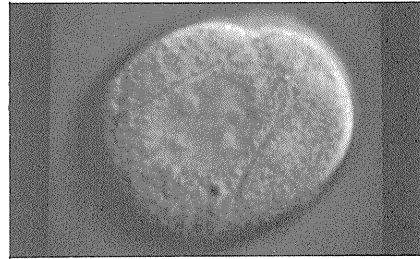
DAS-512はカメラヘッド分離型の顕微鏡用超高感度のテレビカメラです。微弱光のイメージをリアルタイムで撮影できるため、生体構造を動的に研究する手段となり、高倍率、高感度撮影に依り、顕微鏡による研究の新しい処方生まれます。

DAS-512の小型カメラヘッド



DAS-512による撮影例 (モニターからの接写)

- ▼ウシ副腎髄質クロマフィン細胞の微分干渉像
Zeiss Axiovert35 対物レンズ100×(NA=1.4)
・付加レンズ4X 画面の縦巾20 μ m



(写真提供：岡崎国立共同研究機構 生理学研究所
細胞器官研究系 寺川 進 先生)

特長

■超高感度：最低照度 10^{-2} Lux(G1タイプ)
 10^{-4} Lux(G2タイプ)

■小型、軽量：66mm径 125mm長 700g

■低残像

用途

■高倍率光顕用途

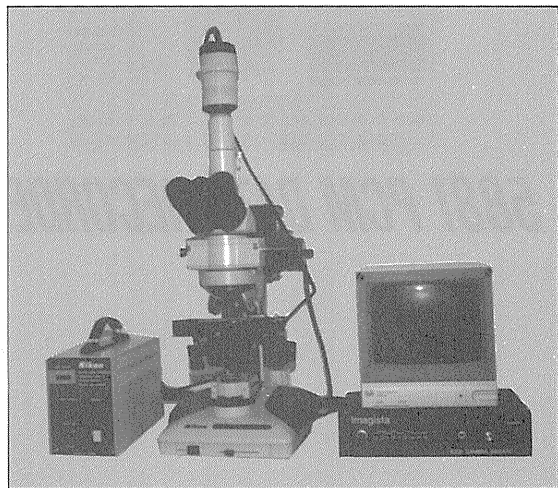
- ・高倍率微分干渉像の撮影
- ・高倍率蛍光像の撮影
- ・微分干渉像と蛍光像の同時撮影
- ・蛍光染色されたDNA、アクチンの撮影

■暗視野光顕法用途

- ・リボソームの溶液中での動的観察
- ・生体超分子の動的観察

■一般蛍光顕微鏡用途

- ・レシオイメージング(Ca^{2+} pH測定等)
- ・免疫蛍光



ニコン落射式蛍光顕微鏡との組み合わせ

株式会社 イマジスタ

東京都中央区富沢町5-5住友生命日本橋富沢町第2ビル
〒103 株式会社 ピアス内
TEL.03-5640-1958 FAX.03-5640-1957

Waverly Press

免疫学の分野を網羅した
国際的に権威あるオリジナル学術誌!

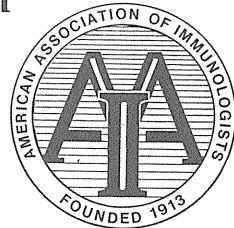
THE JOURNAL OF
IMMUNOLOGY®

Official Journal of The American
Association of Immunologists

Editor-in-Chief: Ethan M. Shevach

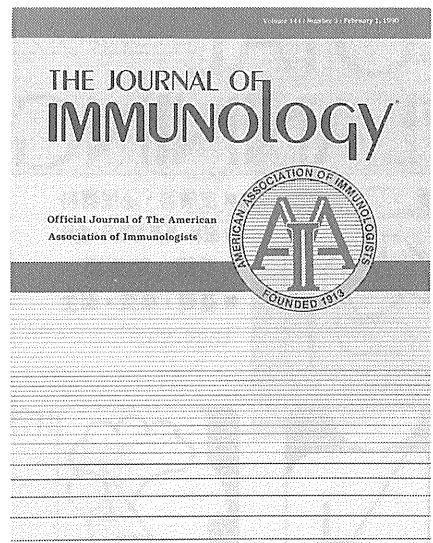
Assistant to the Editor-in-Chief: Deborah C. David

Managing Editor: Joseph F. Saunders



★免疫学の専門誌

本誌はアメリカ免疫学会の正式機関誌であり、細胞免疫学、免疫化学、分子生物学、遺伝学、病理学、微生物学、腫瘍、移植に関連する免疫学の幅広い原著論文を収録しています。



★24回発行

'92年購読料 個人 ¥54,600/年(船便)

'92年購読料 法人 ¥81,900/年(船便)

注) 航空便でも購読可能です。

■表示「円」価格は、消費税抜き価格です。 ■詳細は、本社「代理店業務グループ」までお問い合わせ下さい。

<日本総代理店>

USACO®

ユサコ®株式会社

本社：〒105 東京都港区新橋1丁目13番12号堤ビル

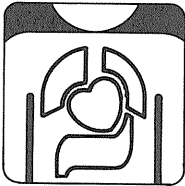
☎(03)3502-6471 FAX (03)3508-0770

営業所：大阪☎(06)344-6624 名古屋☎(052)931-2601 筑波☎(0298)23-1773

TOTAL PLANNING

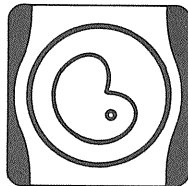
トータル・プランニング

- 医学専門誌・抄録・プログラム・名簿等の広告
取扱い及び企画作製
- 広告・パンフレット等の企画・制作
- 医学会情報・各種医学関連統計データの提供
- 学術研究論文の投稿代行

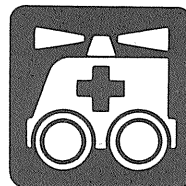


■内科

- 皮膚科・泌尿器科
- 眼科・耳鼻咽喉科・歯科
- 看護・助産婦
- 基礎・検査・衛生

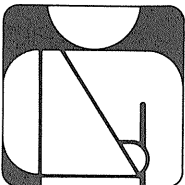


■産婦人科



■総合

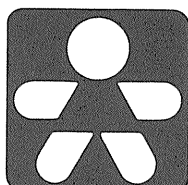
- 化・理・工学
- 医科器械・設備・病院



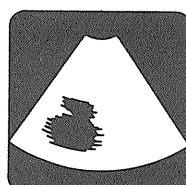
■外科・整形外科



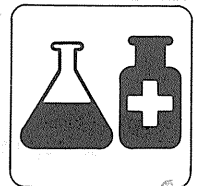
■脳・精神・神経科



■小児科



■放射線・画像診断・レーザー



- 薬学
- 保健・体育・産業衛生
- 栄養・食品学

Medical Advertising Agency

日本医学広告社

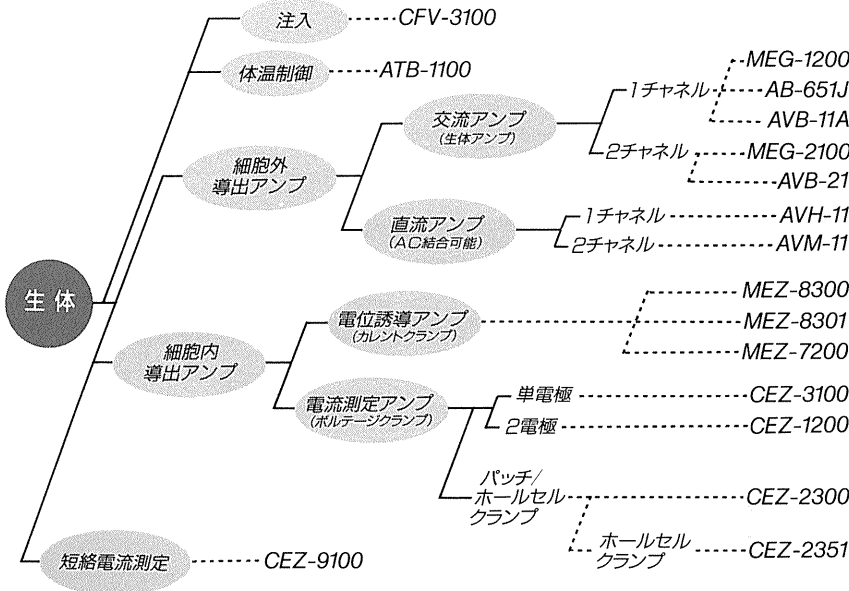
〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9
TEL.03-3292-6961(代表) FAX.03-3295-2134

エレクトロニクスで病魔に挑戦

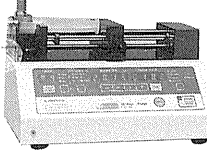
NIHON KOHDEN

電気生理学分野では刺激・反応誘導という手法だけでなく、人為的に細胞膜を制御して膜電流を詳細に分析する方法が広く行われています。これらに応えるべく、日本光電ではアンプ・刺激装置など各種実験用機器を豊富に用意、最適の機器をお選びいただけます。

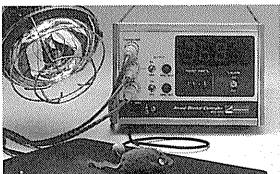
微小電極用増幅器 膜電位固定装置 刺激装置



動物実験関連装置

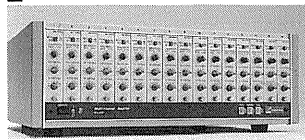


動物用シリンジ式輸液ポンプ CFV-3100

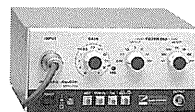


体温制御装置 ATB-1100

生体信号一般用



多チャンネル増幅器 MEG-6100



高感度増幅器 MEG-1200

実験研究用機器の

トータル供給をめざして!

日本光電

〒161 東京都新宿区西落合1-31-4
☎03(5996)8028 宣伝課

カタログをご希望の方は宣伝課宛ご請求下さい。

J. Physiol. Soc. Japan Vol. 54, No. 7 (1992)

編集
兼
発行人

東京都文京区本郷三丁目一〇
 布施ビル(四階)
 日本生理学会
 酒井敏夫

印刷者
印刷所

〒九九七
 山形県鶴岡市山王町一四二四
 平田
 鶴岡印刷株式会社 正

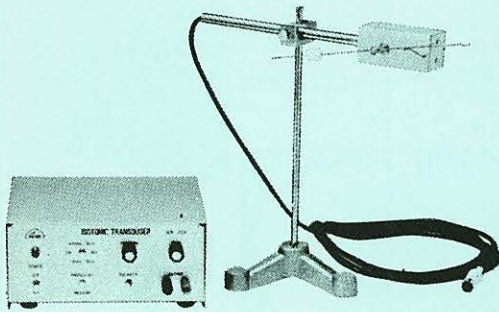
発行所

〒一二三
 東京都文京区本郷三丁目一〇
 布施ビル(四階)
 日本生理学会

振替電
 A 話
 替 X (〇三)三
 東 〇三三
 京 五三八
 三六八
 三 八四一
 一 八五一
 六 一三一
 千 四二六
 二 三五二
 〇 三三
 円 番九四

KN-259 生体用変位計 PAT.P

トランスジューサーと増幅器からなる、微小変位測定装置です。これまでキモグラフィオン・ヘーベルを用いて行なっていた測定を電氣的測定におきかえることにより、取扱いの簡便さ、再現性および信頼性を高めました。



測定範囲	0~50mm (±25mm) (中心軸より100mmの時)
分解能	無限大
最大摩擦トルク	50mg・cm以下
直線性	±3%
出力インピーダンス	5KΩ以下
校正器	10mm 極性切換スイッチ付

理化学器械・基礎医学器械・実験動物飼育機械器具・薬学研究器械・医科器械一般



株式会社

夏目製作所

〒113 東京都文京区湯島2丁目18番6号
 電話 03 (3813) 3251 (代表)
 FAX 03 (3815) 2002